

ぐらしのなかの花

1月

昭和57年1月1日発行(毎月1日発行)第70号 昭和51年2月25日第3種郵便物認可 年間購読料3,000円



中日園芸文化協会

あけまして

おめでとう

置かれた場で
最善を尽して

一日一日を生きる

植物のこころを
今年も胸に

やつてゆきます

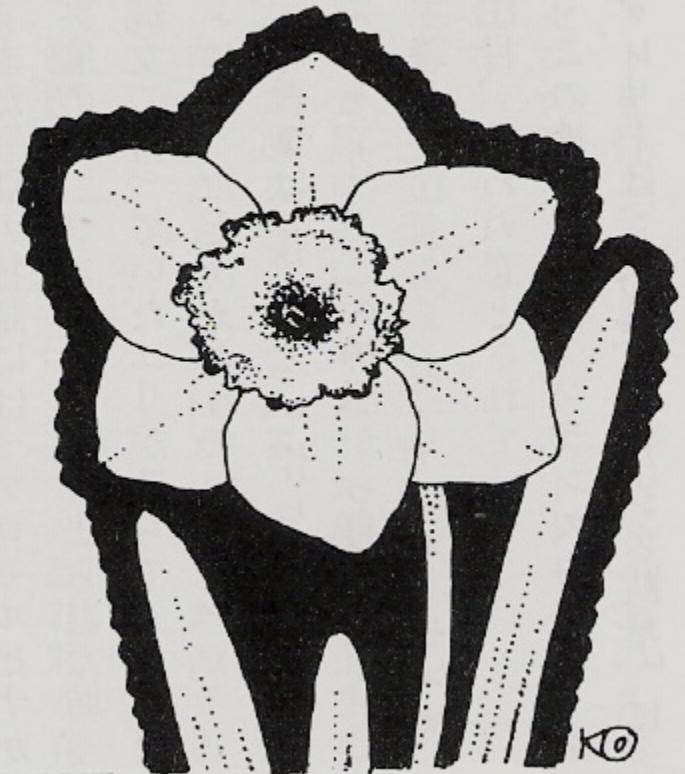
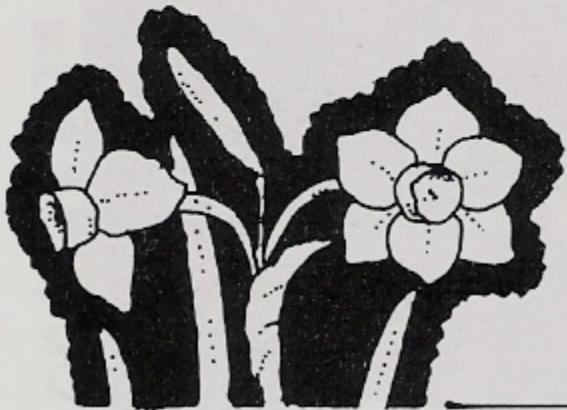
旅

スイセン

Akira Horinouchi

日本アイリス協会 会長

堀 中 明



あゝ プロサーピナ デイスの車より
汝が 恐れ落せし花を 今ここに
——シェイクスピア

スイセンは、春の花として最も美しく、
言葉で言い尽くせぬほどの魅力ある花である。

この花の故郷は、ヨーロッパでイベリア半島、地中海沿岸や北アフリカで、房咲スイセンは、ギリシャから中国、日本にまで広く分布している。

属名のナルキススは、ギリシャ語で「麻酔させる」という意味のナルケから来ているが、伝説のナルキソスの名に由来するともいう。そして野生の種は、約三十種ある。

さて、スイセンの歴史は古く、今から約二千年以前に、ギリシャ人の居住者が作ったと思われる房咲スイセンの花輪が、エジプトで発見され、イギリスのキューガーデンに保存されているという。

ギリシャ最古の詩人、ホメロスは、「デーメーテールへの贊歌」に「燦然(さんぜん)と輝いているスイセンは、不死の神々や死すべき人間にも気高い光景である。その根より数多く花咲きいで、かぐわしい香に大空や地上が微笑む。そして潮の海の波すらも」と。

そして、ギリシャの悲劇詩人、ソポクレス(B.C.496~406)も「コロノスにおけるオイディップス」に、「そのかみの日、ニンフと共に酒盛するディオニイソス歩める地、天上の露に育てられしスイセン

咲き誇るスイセン

白花大杯スイセン インバー・ボリー



は、昔より偉大な女神の冠する美しい房なす花を朝毎に花開く」と述べている。

ローマのオウイディウス作のエコーとナルキソスの物語は、ギリシャ神話として多くの人々に知られている。美少年ナルキソスが、水に映つた自分の姿にあこがれて疲れ死に、その跡に咲いた名もない一輪の花に、スイセンの名が付けられたという。

また、別の物語には、プロセルピナが冥府の王、プルートに連れ去られた時、彼女の持っていたユリが落ちて、スイセンになつたと伝えられている。

花言葉は、後になつて作られたもので、スイセンは、この神話から自己愛、自己主義とされ、そのうちラッパズイセンは、注目、叶わぬ恋とされている。

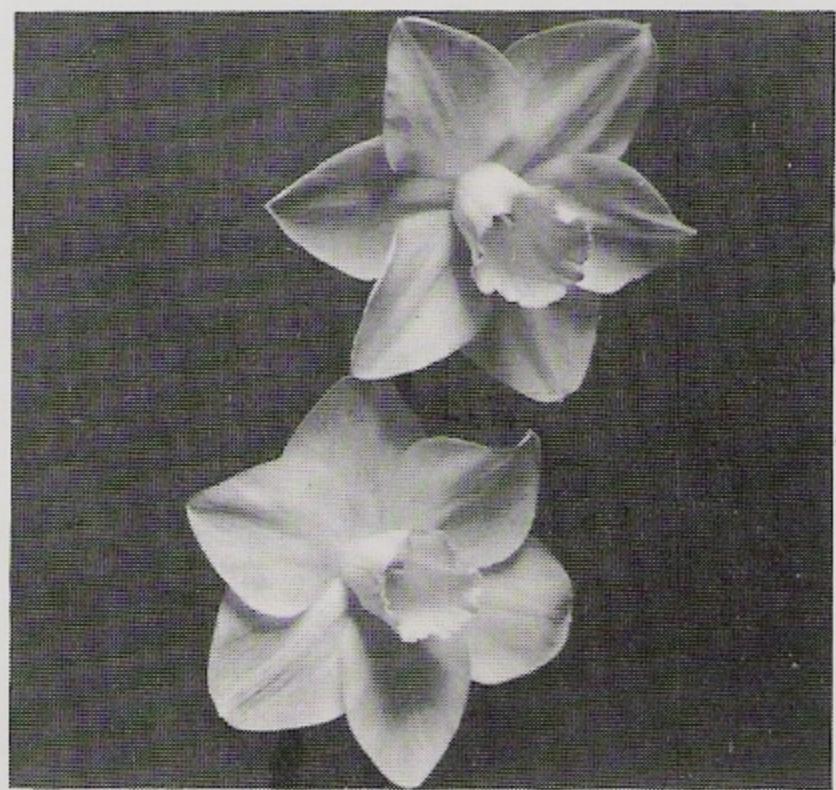
この神話に因み、フランスの詩人、ヴアレリーは、その詩「ナルシス断章」に、

とらえられない自己を格調高く詠つている。

品種と分類

スイセンの品種は非常に多く、英国の王立園芸協会に一九五四年までに登録された品種だけで、一万一千余品種があり、毎年二百品種ほど追加されている。ただし、すべてが栽培に見られるわけではなく、庭植えや切り花に適するものや、観賞に良いものが残っていくわけである。

最近、我が国でもかなりの品種が市販されるようになり、愛好家も増えているが、趣味においても、イギリス、アイルランド、ニュージーランド、オーストラリアやアメリカなどのこの分野の先進国にはるかに遅れている。近年、盛んなシ



ヨーを行つてゐるアメリカが、このスイセンの愛好では世界をリードするかも知れない。

英國王立園芸協会で作られた一九五〇年の分類を基に、一九六九年に改正された分類は次のようである。

部門1から9まではガーデン起源である。

部門1 ラッパズイセン…副花冠が花被片と同長かそれより長いもの。

部門2 大杯スイセン…副花冠が花被片の三分の一以上であるが、花被片より短い。

部門3 小杯スイセン…副花冠が長くても花被片の三分の一である。



部門4 八重咲スイセン

部門5 トリアンドルスの特徴を持つもの。

部門6 N、キクラミネウスの特徴を持つもの。

部門7 ジヨンキルラスイセン…N、ヨンクイルラ（キズイセン）のグループの特徴を持つもの。

部門8 房咲スイセン…N、タゼツタ（房咲スイセン）の特徴を持つもの。

部門9 口紅スイセン…他の種の混ざらないN、ポエティクスのグループの特徴を持つもの。

部門10 種、及び野生種のフォームと野生種の雜種。

部門11 スプリット・コロナ・スイセン…副花冠が三分の一以上裂けるもの。

部門12 前記のどの部門にも属さないもの。

花色はa、b、cなどで表したが、

一九七七年以來、W（白）、Y（黄）、P（ピンク）、G（緑）、O（オレンジ）、R（赤）、というように表している。なお、

副花冠は三つの文字で表し、初めは内部の底、次は中央部、三番目は縁の花色を示し、例えばグリーン・アイランドは、G W Yのごとくで、この副花冠は底がグリーンで白に黄の縁とりであるからである。ただし一色のものは単に一字で表し、例えばフォーチュンは、副花冠はオレンジ一色だからOとする。

さて、それぞれの部門について品種や推移を簡単に述べる。カッコ内はほとん

ど登録年代を示し、最新のものは発表年代を書いた。なお一九〇〇年代のものは「十九」を省いた。登録や発表年代は作出年代でなく、実際は数年から、あるものは十年以上も前に作られていると考えられる。

ヘラツパズイセン

*黄色ラツパズイセン(マーク)

園芸品種は野生のラツパズイセンN₁プセウド・ナルキススの亜種のマーヨルが、ほとんどの改良の祖先になつていて、戦前、我が国でも知られたエンペラー(一八六五)は、亜種ビコロルが母本として作られ、最も古い黄色ラツパの品種として知られる。

切り花用に知られたキング・アルフレッド(一八九九)はマーヨルを母本としてできたもので、発表された時センセー



アーティック・ゴールド(黄色ラツパ)

ションを起こし、当時一球一〇ポンドで多くの球根が売られた。この品種は今から八十年以上前に作られたもので、作出者の死後に開花している。続いてマグニフィセント(一四)などが作られ、やがて観賞用にいくつかの優れた品種が作出されたが、そのうちキングズコート(二八)は形の非常に美しいものとして賞賛された。

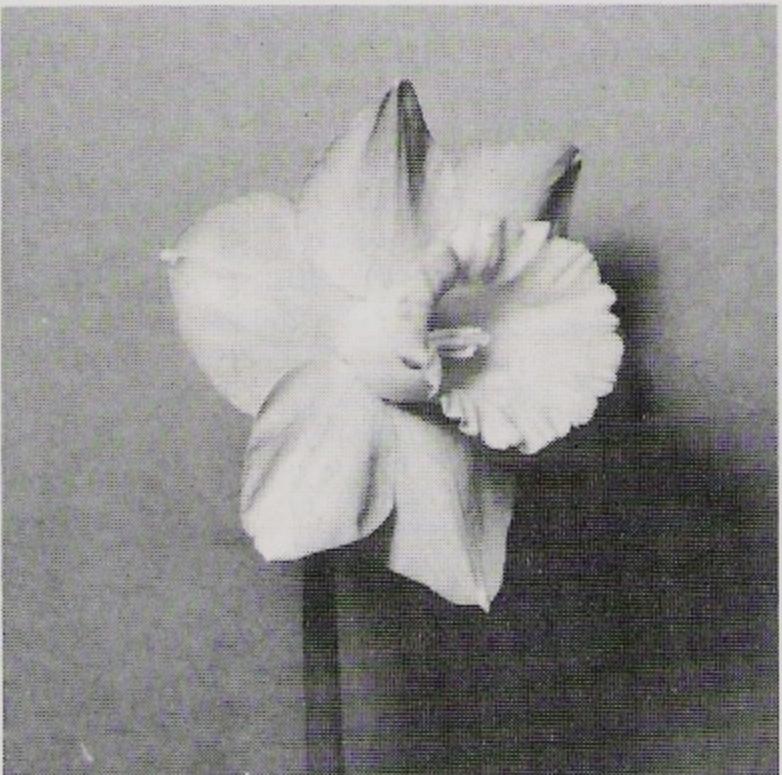
さて、現在、海外で知られる優れた品種を記すと、アーティック・ゴールド(五一)は花色が濃黄色で名花として知られ、今日ではポピュラーである。スペニッシュ・ゴールド(四八)はキングズコートの子で、黄金色の群花は庭植えで立派に見える。ゴールデン・ラブチュア(五一)は花弁が非常にスマーズで花色は美しく、古い品種と比較するとたいへんきれいな色であることがわかる。オリンピック・ゴールド(六三)は明るい黄色で幅広い花弁がよく重なり、観賞向きに最も立派な花の一つである。ストラスカネルド(五九)は濃黄の黄金色で、非常に茎が高く特色ある品種である。

その他、インカ・ゴールド(六五)はオレンジ色を含んだような濃黄色で、洗練された花形ではないが大きな花を付ける。最新花には、マイダス・タッチ(七七)やゴールド・コンベンション(七九)が知られている。

余談だが、黄色ラツパはアイルランドのリチャードソンによつて多くの名花が作られた。白色ラツパに貢献したウイル

オリエンピック・

ゴールド（黄色ラッパ）



たものでプセウド・ナルキススと、その亜種のビコロルとの交雑からできただとされている。その後ボニソン（二七）やコンテント（二七）が知られたが、後者は淡い二色花である。

このクラスには、かなりの品種があるが、濃黄のラッパを持ち、形の美しい名花といえるものがほとんどないのは惜しい。古名花のトゥルーソー（三四）はラッパが銅色を含んだもので、今も海外でよく知られる。ブリアンブル（四六）はこのクラス中、最も有名で整った尖弁で形もよく、名花である。ニューカースル（五七）は幅広い立派な花弁を持ち、ラッパも濃黄に近く、最も優れた花形を持つが、花弁が内側に傾くことが惜しい。ダウンパトリック（五九）はラッパがレモン黄で大きく、ポピュラーな品種である。その他にディスカンソ（六五）、トラディイション（六五）などが知られている。

* 白・黄ラッパ（ワーム）

メルドラム（七七）はアーフティック・ゴールドを母本として作られた最新の品種の一つで、濃い黄金色でたいへん花弁が厚い。付け加えるに、オランダで作出された古花のゴールデン・ハーヴェスト（二七）、アンサー・パーサブル（二九）などは実用種としてよく知られた。なお、淡黄色にはハンターズ・ムーン（四一）、ムーンストラック（四四）が有名であった。

* 白・黄ラッパ（ワーム）

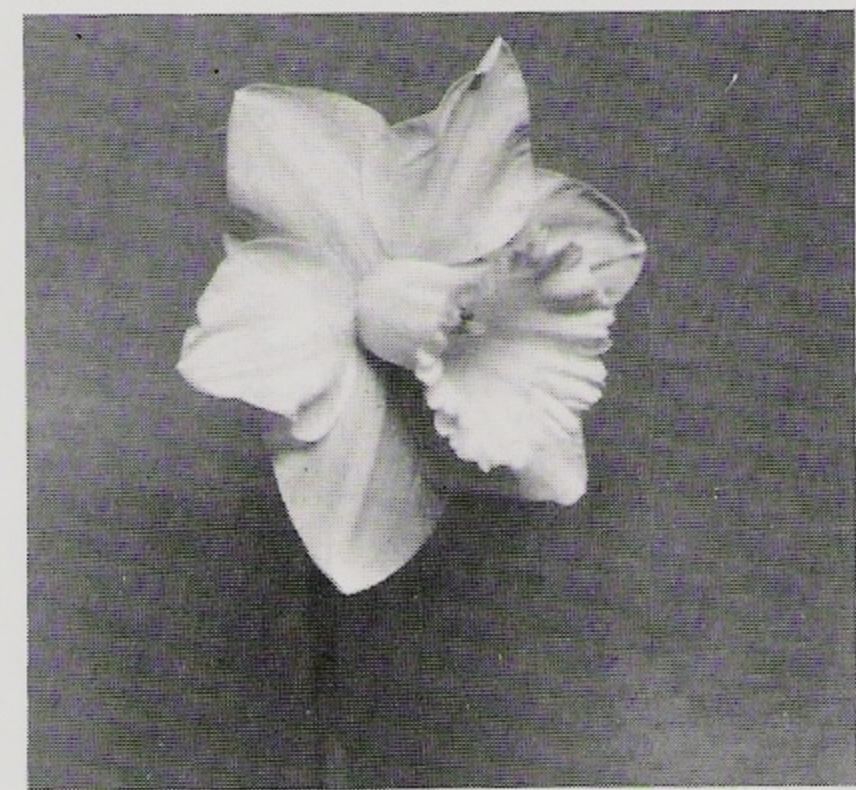
この二色花は、我が国でも古くエンプレス（一八六五）が知られ、このクラスの最初の品種といえる。これは今から一一五年余り前に、W・バックハウスが作出し

品種の祖先はプセウド・ナルキススの亜種の白花のモスカーツスやアルペストリスと、二色調の乳白のアルベスケンスである。オランダ作出のマダム・ド・グラフ（一八八七）は、最初に紹介された有名花で、アルベスケンスにエンプレスを交雑して作られたといわれ、二色調の乳白色である。これに黄ラッパのキング・アルフレッドを交雑して育種にも重要な役割を果たしたやはり乳白の二色調のミセス・E・H・クレラージ（一二）が作ら

アルスター・クイーン(左)と

パナッシュ(右)(白色ラッパ)

クイーンズコート(白色ラッパ)



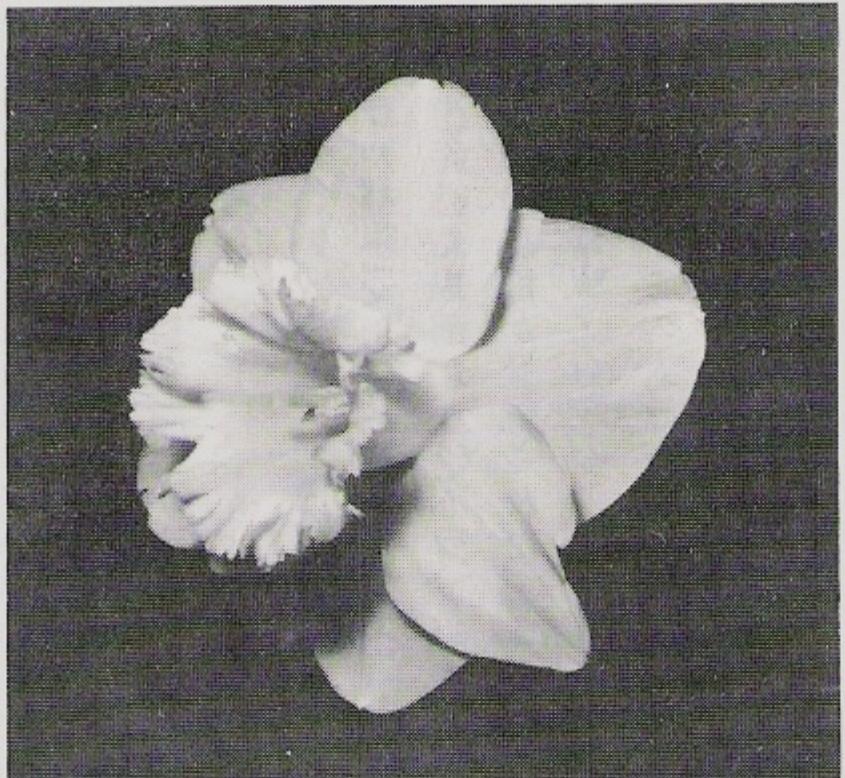
やがてイギリスで有名なエンゲルハートによつて作られた画期的なビアーシバ(二二)は純白で、尖弁でベル形のラッパを持ち、広く栽培された名花で、我が国でも戦前知られた。その後アイルランドのウイルソンによつて多くの有名花が作られた。カンタツリス(三二八)は、すべてのスイセン中、最も洗練されたものの一つとして知られ、尖弁と細長いベル状のラッパを持ち、たいへん整つた形の歴史的名花である。ブルーシェーン(三二八)や

カンチエンジュンガ(三四)は巨大な白色のラッパとして知られたが、時にきめが荒く咲く欠点もある。このころオランダでマウント・フッド(三二八)が作られていて、庭植えに適する品種として戦後我が国にも導入され、最もポピュラーになった。ヴィジル(四七)は最も純白に近い花である。リチャードソンもいくつかの白花を作つたがそのうちグレーシャー(五六)は最もよいものと思われ、ラッパの縁がひだ状になる。ウイルソン作のエンプレス・オブ・アイルランド(五一)は最も有名な品種で、開花した瞬間は美そのものを感じさせる。この花は現在では品種改良に、主に父本として各国の育種家が交雑に用いている。その子に、この花を優美にしたような形のクイーンズコート(五六)や最近のマシーディーズ(七〇)、エイプリル・ラブ(七四)やホワイト・スター(七〇)等、いくつかの美しい花がある。

次にウイルソン作出の最後の名花とい

グレーシャー（白色ラッパ）

ティール（逆色ラッパ）



える二品種を記す。パナッシュ（六一）は、その花弁はよくオーバーラップし、ラッパもスレンダーで完全といえるくらいに調和がとれた花で、現在でも観賞用にこの品種を凌ぐものは紹介されていない。

アルスター・クイーン（六二）は、リチャードソンがウイルソン作出の最も優れた花として紹介した品種で、コンスタンタンに非常に立派な花を付ける。

ちなみに古花のホワイト・モナーク（四八）は、直径約十八センチに咲くと記され、スイセン中、最も大輪であるが花形がよくない。

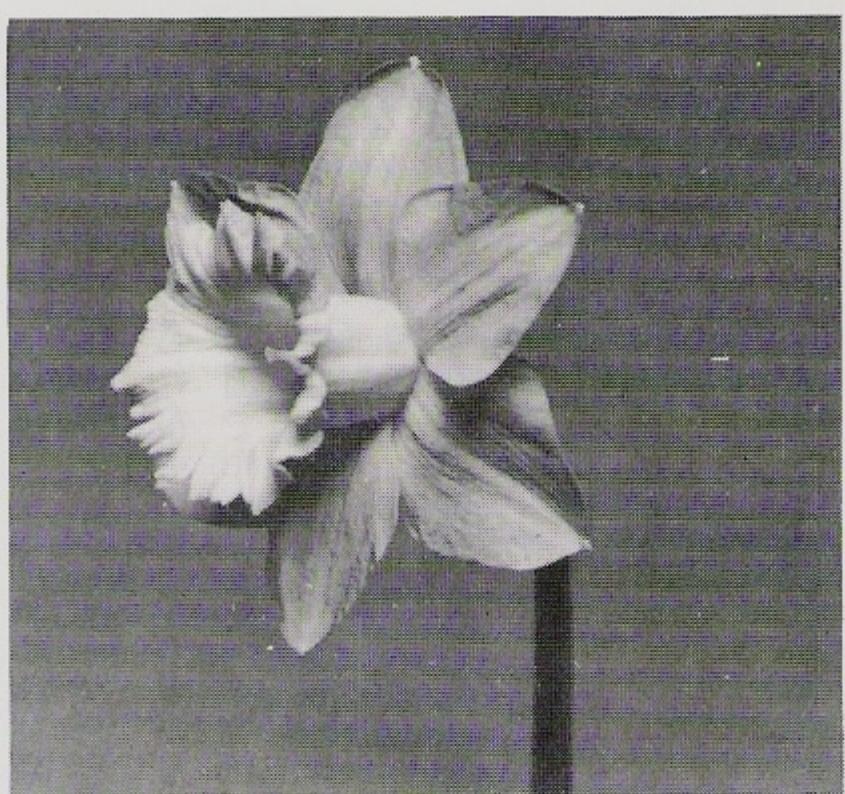
* 逆二色ラッパ (IM-III)

アイルランドで黄色ラッパのキング・オブ・ザ・ノース（二七）と、白・黄ラッパのコンテント（二七）からいくつかのレモン色の花が作られた。この中に逆二色のスペルバインダー（四四）ができ一九四九

* ピンクラッパ (IM-I)

最初のピンクスイセンは、今から六年ほど以前大杯スイセンに見られ、この作出者イギリスのR.O.バックハウスは、またピンクラッパのローズティー・トルペット（五一）も作った。これは花弁

年に紹介され、この品種がただ一つで、長い間有名であった。やがてアメリカでいくつかの良いものが作られた。これらの品種は、花弁が淡黄で開花後二、三日でラッパが白くなる。ルーナー・シー（五四）やハニーバード（六五）がこれである。後者は、やはりスペルバインダーと同じ両親の組合せであるが、形が美しいためイギリスなどで良いものとして知られた。最近のティール（七六）は花弁の黄色の濃いものである。その他、大きなラッパのドーン・ライト（七〇）やサン・スノー（七〇）などの品種が知られている。



もよじれ、花も小さいが、よくローズに着色する。これよりも先、すでにオーストラリアでは多くの品種が作られていて、そのいくつかはアイルランドやイギリスに導入されていた。そのうちピンク・オブ・ドーン（三四）はソフトピンクといわれ、ロスリン（四五）はローズピンクであり、またカランジヤ（五〇）は銅色を含んだものである。近年のクプレナ（五六）は非常に美しい花で、ラッパは杏ピンクである。むしろアイルランドやイギリスでは、後述するピンク大杯に育種の努力が傾けられていた。

リマ（五七）はアメリカ作出の品種で、アイルランド作の大杯のケンマー（三七）と、オーストラリア作のラッパのドーングロー（三六）より作られ、鮭肉色のフレアー状のラッパで最もボビュラーである。ポン・ローズは、そのラッパは細長いベル形で最も優美でローズピンクに着色する。そしてオーストラリアで最も高価で市販された。なおニュージーランドのシティト（六七）は、ラッパが少し短いが濃ローズである。

*赤ラッパ（マイロまたはマイロ）

三十年近く以前だが、赤ラッパとしていくらかの品種が登録された。このほとんどすべてはW・O・バックハウスが作ったもので、この人は有名なR・O・バックハウス夫妻の息子で、両親が達し得なかつた目的の一つの赤ラッパを最初に作出了。これらは、花弁が黄でラッパはよじれるが、花色の優美なものである。

最近にかけて、花弁が黄でラッパがピンク色のものが発表され、アメリカのものはロリキート（八〇）で、リマからできたもので花形も似ているようである。オーストラリアではイアン・シャンクリー（七五）がすでに発表され、この花は花弁

が赤橙色のものである。レッド・カーテン（五六）、デシアード（五六）、ブラー・フォックス（五九）などの代表的な品種を見ると、よくラッパが赤橙色に着色する。グレンファークラス（七九）は最近の作出花で、ラッパはオレンジであるが花弁は非常に厚い。このような品種を見ていると、やがて赤ラッパのより完成された品種ができることが想像できる。なおオーストラリアで作られたトランペット・コール（六一）は、この国で作られた唯一の品種と思われるが、小輪でラッパがよく着色しない。



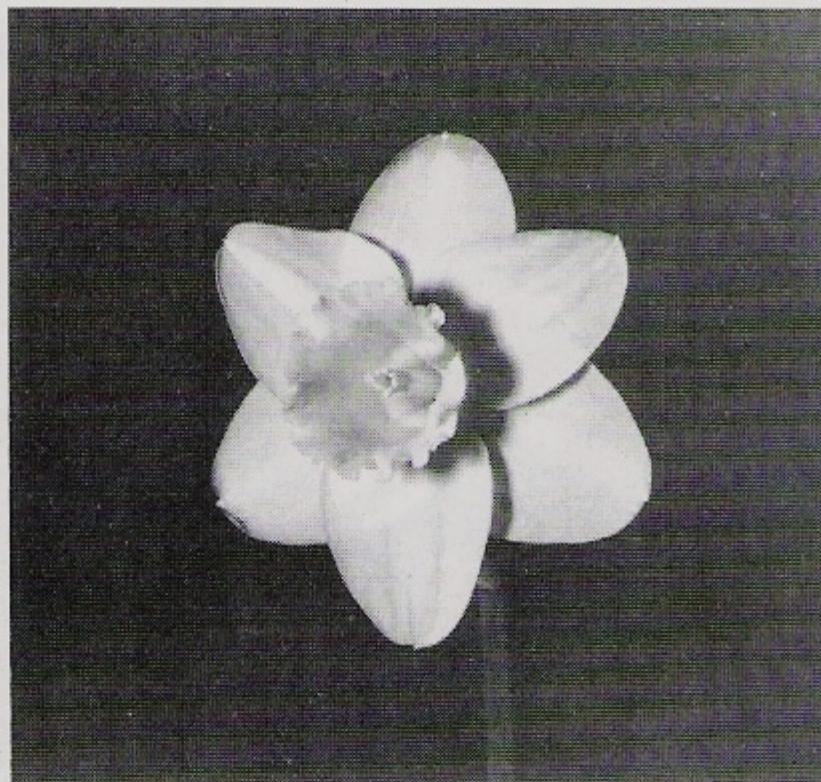
先に述べた赤ラッパとは別に、花弁が白でラッパが赤色の白・赤ラッパが作られているが、完成の途上にある。

ヘ大杯スイセン

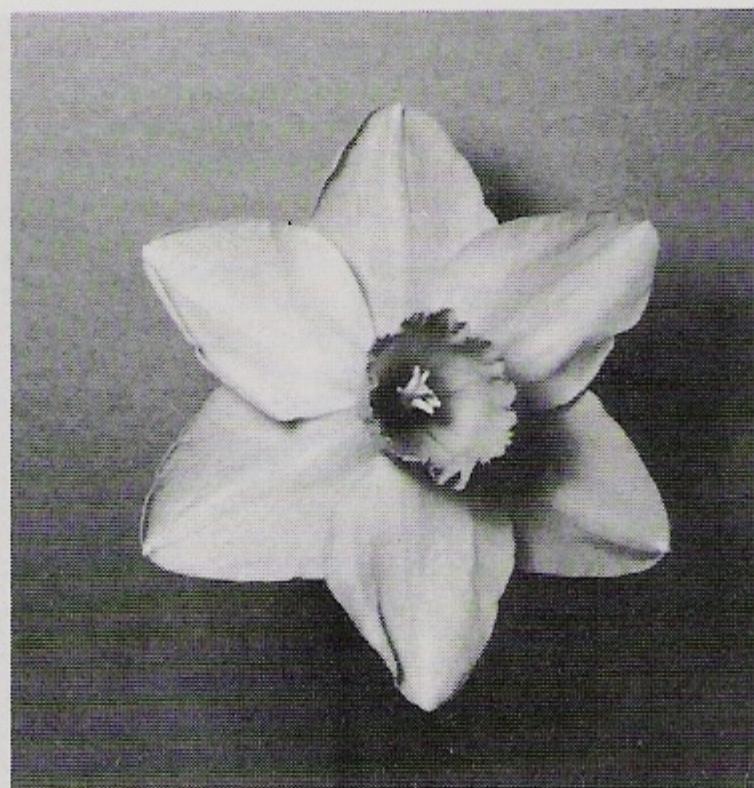
*黄色大杯スイセン (2Y—R)

大杯スイセンは、ラッパズイセンと口紅スイセンの種、または品種の交雑からできしたものである。サーウトキン(一八八四)

は、今から百年ほど前に作られ、最初に紹介された品種で、当時、非常によく知られた。その後、やや淡い黄色のカールトン(二七)は、海外では実用的にポピュラーであった。ゴールウェイ(四三)はラッパ形の黄金色で、このクラス中、最も有名な品種であった。その他セント・ケバーン(四九)や最近の優れた名花キヤメロット(六二)、ゴールデン・オーラ(六四)がある。



ゴールデン・オーラ (黄色大杯)



フレーミング・ミーチュア (黄・赤大杯)

*黄・赤大杯 (2Y—R, 2Y—O)

この花色は最もよく知られ、最初口紅スイセンのポエティクスの亜種ラディイフロールスの変種ポエタルムの影響で、カップは赤橙色の縁取りであつたが、全體が赤色のものが作られていった。W・

バックハウスは、一八八四年有名な小杯で黄・赤のバリイ・コンスピクウスを作り、この花は長い間市場の花としてポピュラーであつたという。

古花のヘリオス(一二)は早咲きで切り花用によく知られた。やがて画期的なフオーチュン(二三)が作られた。この品種はイギリスのウエアの実生混合から発見されたもので、彼が一九一七年に死ぬ直前、知人に分けたため絶滅からまぬがれたという。最初、一球五〇〇ポンドで発売され、多くの球根は五〇ポンドの時、買われたといわれるくらい高価であつた。そして切り花市場をリードする品種にな

グレン・クロヴァ（黄・赤大杯）



クライグ・ドー（黄・赤大杯）



つた。その後、ラストム・パー・シヤ（二〇）などが有名であり、この花は露地で作るカップは淡いオレンジであるが、保成すると橙赤色となる。そしてフォーチュンを立派にしたようなアーマード（三八）が作出された。その後、観賞向きに最も有名になつたシロン（四三）が作られた。

この品種は花弁が濃黄で、しわ一つなく、イギリスではカップが赤色となるが、我が国ではオレンジで縁だけ赤色になる。さて、我が国で市販されている品種にレッド・ラスカル（五〇）、ガーデン・ジャイアント（五〇）があり、前者は花弁が黄色でカップが濃い橙赤で、後者はカップが黄色に赤橙の太い覆輪である。なお、観賞用や庭植えにコート・マーシャル（五六）、ボーダー・チーフ（五三）やフレーミング・ミーチュアード（六一）などが良い花である。サンジバー（五九）は花弁が濃黄でカップが最も濃い橙赤色である。

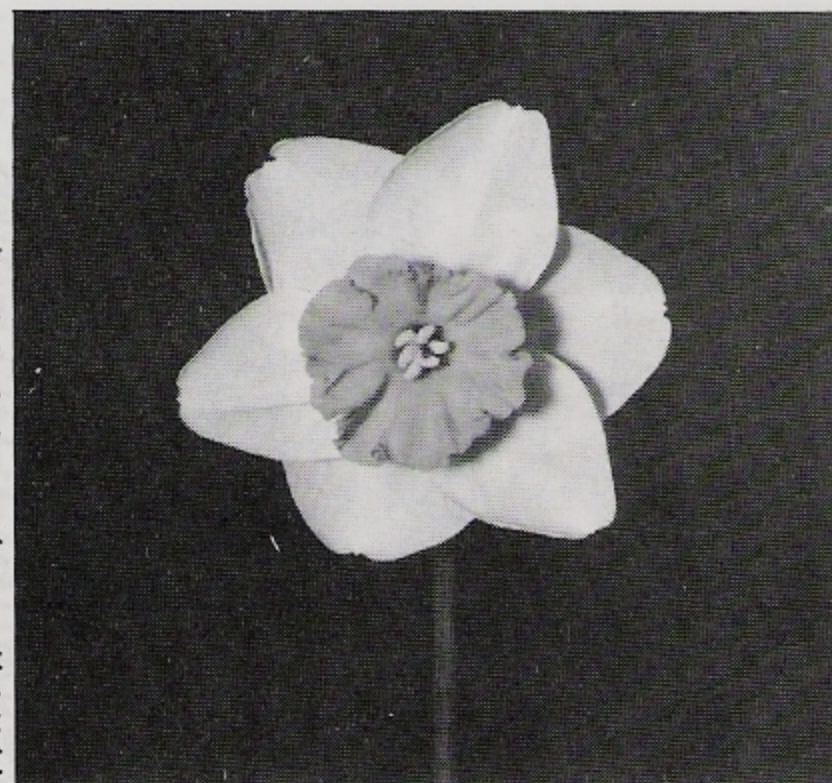
バルカン（五六）はシロンを父本としてでき、フォルスタッフ（六〇）はシロンを母本としてできたもので、共に有名花として知られている。最近では観賞用にいくらかの立派な花ができ、そのうちグレン・クロヴァ（七八）はカップは赤橙色で花弁の幅が非常に広い。

花弁の黄色にオレンジを含む品種がいくつか見られる。フラムボイアント（六三）は濃黄の花弁に橙色が流れ、カップは濃赤橙色である。花弁にオレンジ味の強いものは、ジブシード（六四）、フェアリー・フレーム（六二）などである。最新の品種ではクライグ・ドード（七九）があり厚い花弁は非常に立派である。小杯スイセンの花色にはアブリコット・ディステインクション（四九）、アルトリリスト（六五）やサバイン・ヘイ（七〇）がある。

*白・赤大杯 (2W-R, 2W-O)

エングレハート作のウイル・スカーレット（一八九八）は、ブセウド・ナルキスの亞種アブスキスと。エティクスの変種ボエタルムよりでき、この花のカップが強い赤色で、過去に見られなかつたので、紹介された時センセーションを起こしたという。多くの育種家はこれを親として用いたが、この口紅スイセンの影響で花弁はよくなかった。この花弁を改良するために、やはり口紅スイセンの変種ヘルニクスやレクルウスが使われている。R・O・バックハウスとその夫人は、ハイディーズ（一五）を作つた。この品種は当時、白・赤大杯の最も良いものであつた。

オレンジのカップのキルワース（三八）と、カップが赤色のアーバー（四八）がある。名であったが、後者は我が国では日陰でしか着色しない。この二品種の交雑から



アヴェンジャー（白・赤大杯）

優れた花ができるのがわかり、次の二品種は、その例である。オライアン（五九）はカップがオレンジで、花弁の幅が非常に広く、アヴェンジャー（五七）は最も有名な品種で、カップは濃い赤橙色である。このクラスにはラマシーズ（六〇）、ドン・カーロス（六一）、トリアドー（六一）、アイリッシュ・ローヴァ（六七）、リビア（五九）など有名な品種がある。

*白・黄大杯 (2W-Y)

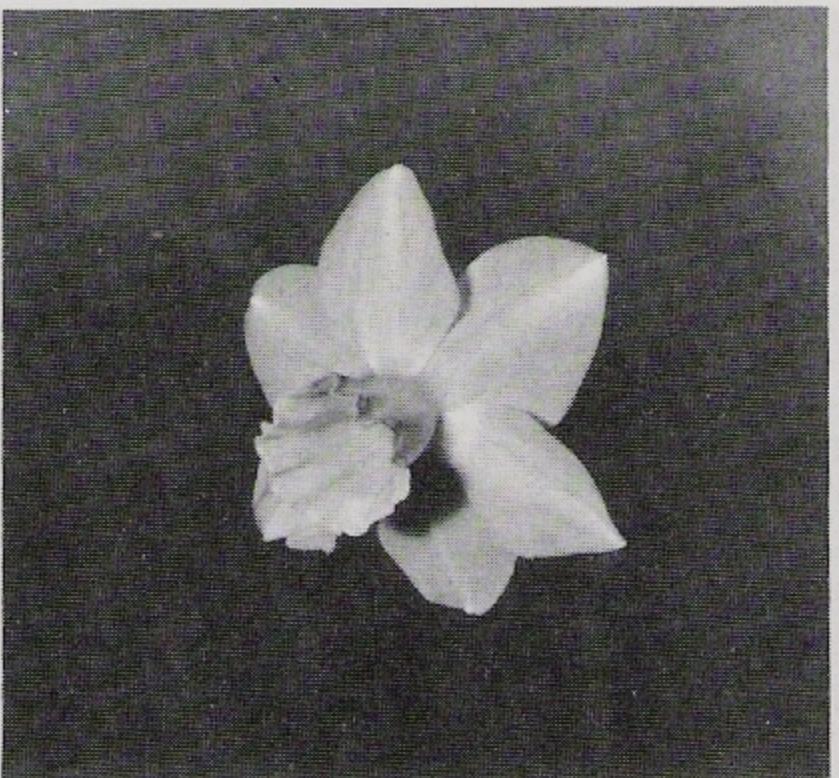
古くジョン・イーブリン（二〇）やポリンドラ（一七）が知られ、四十年以前、有名なグリーン・アイランド（三八）が作られた。この花のカップはグリーン味の白色で輝くレモン色のバンドを持つ。最近我が国でも市販され、現在これを親として多くの優れた品種ができていて。

かつてアイルランドで作られたチューダー・ミンストラル（四八）、アイリッシュ・ミンストラル（五八）、マイ・ラブ（四八）や、アメリカで作られたフェステイヴィティ（五四）が今なお美しい品種として知られている。

*逆二色大杯 (2M-M)

オーストラリアでビンキー（三八）が作られこのクラスで唯一の品種であり、カップは白色に近くなる。その後イギリスでラッシュライト（五七）が発表され、この花は長いカップを持つ。やがてアメリカでナザレス（五八）、ディドリーム（六〇）、ベサニー（五八）など一種の品種が紹介さ

クラウド・ナイン（逆二色大杯）



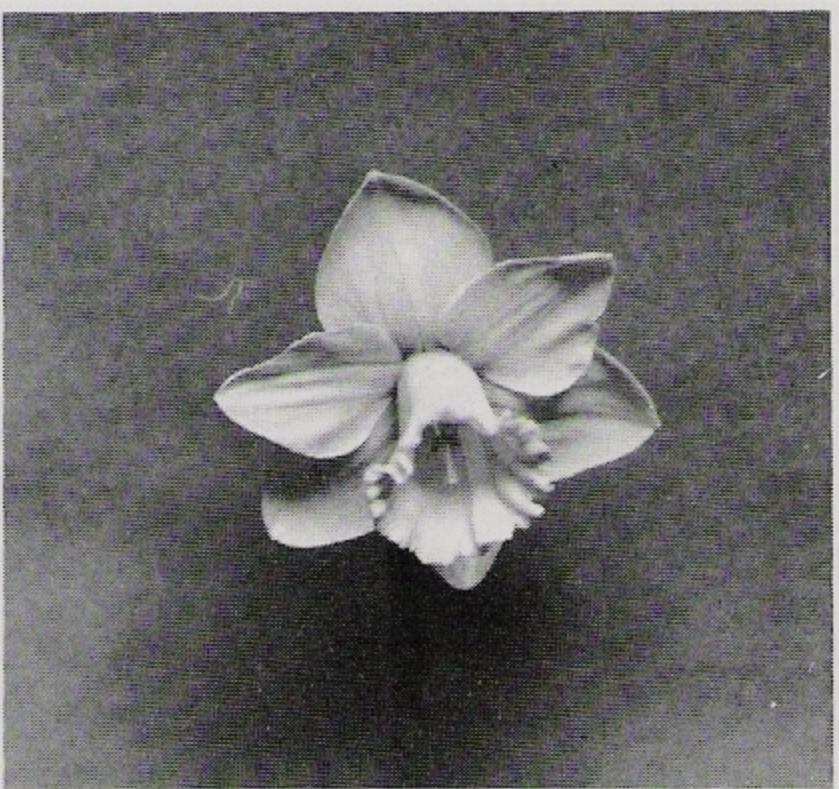
れた。これらは共に長いラッパ形のカップで、前者は最も良く逆二色を表わす。あと二種は共に優れた形の花で、世界に広まり有名になった。

アイルランドでは、黄大杯のキヤメロットとディドリームから二種ばかりの品種が作られている。またオーストラリアでは、エリマッタ（六八）が作られたが、ラッパはほとんど白くならない。この逆二色ではアメリカガリードし、ジョンキラ・スイセンの逆色にまで発展していくた。

* 白色大杯 (2W - W)

最初の育種は非常に古く、一八三五年にイギリスのリーズが試み、これらはバーに売られたという。その後、今から約六十年以前にスコットランドやイギリスで育種され、近年はアイルランドやイギリスで多くの優れた花が作られた。

カニスプ（白色大杯）



ラッパ形のものではゼロ（三五）、トルース（三六）、ルードロウ（三七）があり、それぞれ美しい品種であった。アヴェ（三五）は、そのラッパ形の副花冠の縁に切れ込みがなく、この縁を美しくするために改良の親にも用いられた。アーリーミスト（五二）は、白色ラッパのカンタツノウヘッド（五四）は・エンプレス・オブ・アイルランドに似た見事な品種である。

短いカップを持つものは、美しいピュアリティー（六〇）、グッド・メジャーアリティー（六〇）、グッド・メジャー（七五）などがあり、イースター・ムーン（五四）は整った花で、育種にも用いられている。平たいカップのステインリス（六〇）も有名であり、純白に近いベン・ヒー（六四）は、とりわけ美しい。

次に近年の二つの名花をあげると、カニスプ（六〇）はラッパズイセンに近いタイプで、第一級のショット向きの名花。両

グッド・メジャー（白色大杯）



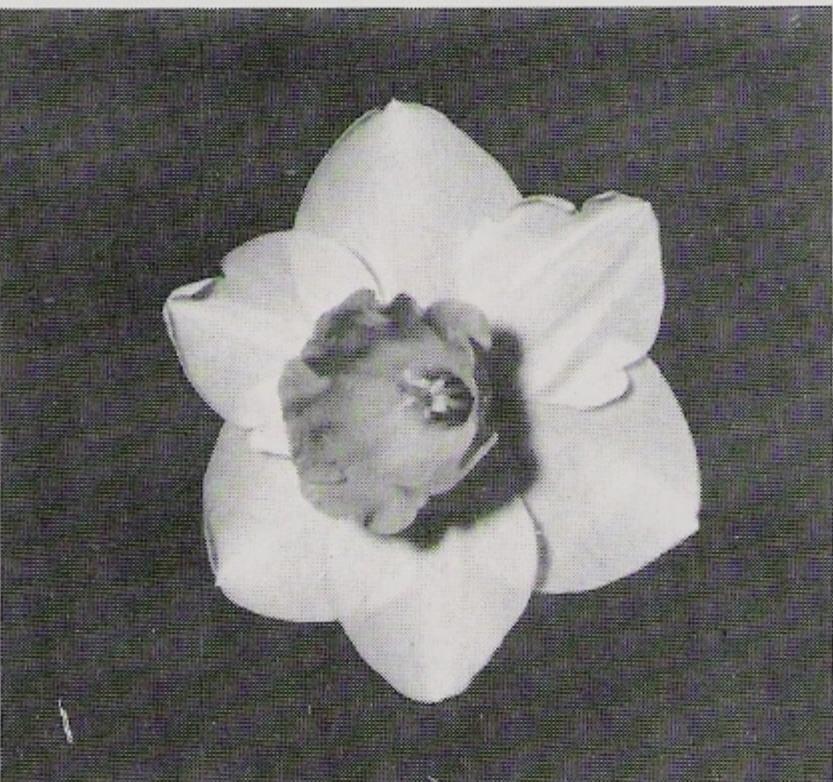
親はアヴェとアーリー・ミストであり、花形は優美そのものである。インバー・ボリーはイースター・ムーンの子で、花全体の調和が最も美しい最近の名花である。開花した時は長いカップが淡いピンクで、これに注目してピンクの品種と交雑し優れたピンクズイセンができている。

* ピンク大杯 (Pink Cup)

古い時代のピンクの作出には、花弁が白でカップがクリームのホワイト・センチネル(二六)と、その姉妹花ミッティーレーン(二三)が役立った。ピンクズイセンの花色はサーモン、コーラル、フランゴ、ローズ等、色調の異なるさまざまなもののが見られ、最近ではほとんど赤色に近いものがある。

今から六十年以前、イギリスで最初のピンクズイセン、ミセス・R・O・バッカハウス(二三)が作られ有名になつた。

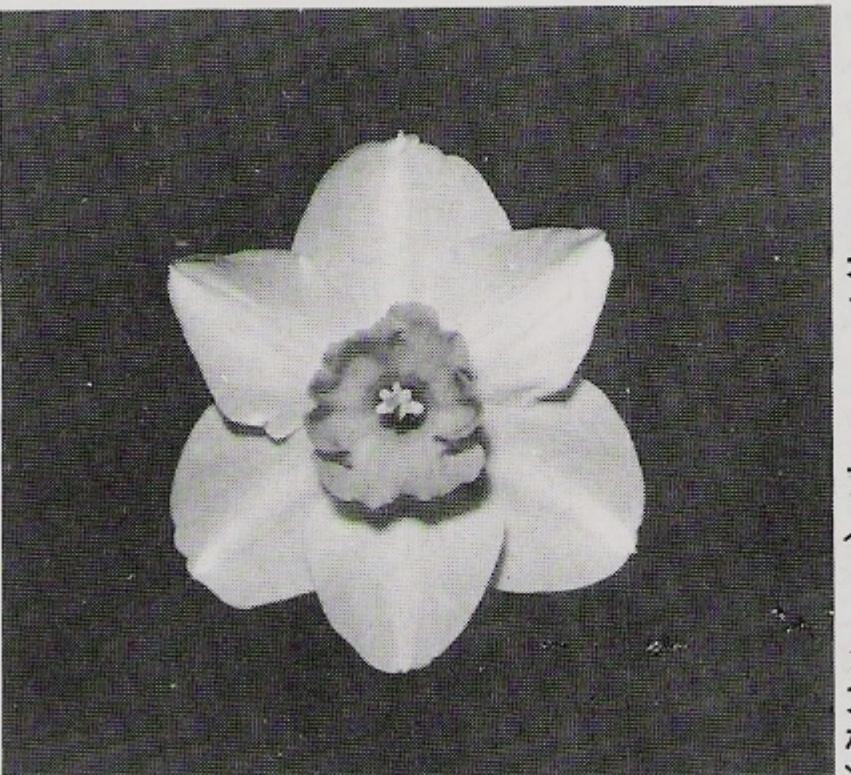
ロマンス (ピンク大杯)



余談だが、我が国でも昭和の初期、園芸家の伊藤東一氏がこの品種を、花友達がピンクといわれるスーザを入手したので、彼も負けぬ気で清水の舞台から飛び降りたような気持ちで、一球二百数十円で導入したことである。その後、アイルランドのウイルソン作のインテリム(四四)が知られ、カップは淡いレモン色にピンク覆輪であるが、この品種より多くのピンクが作られた。

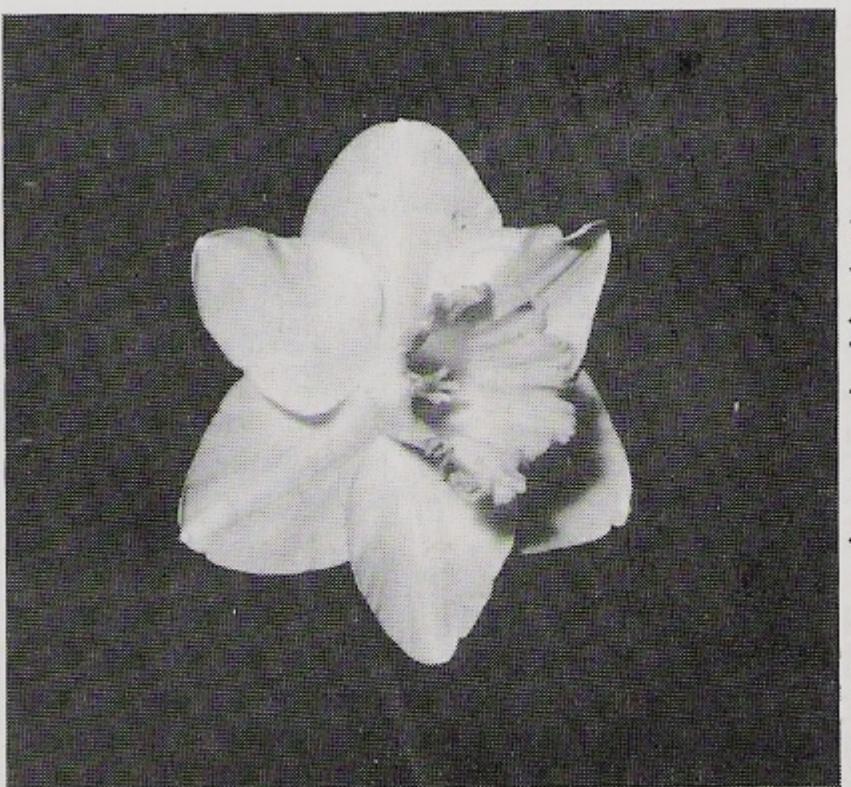
アイルランドの作出花では、サーモン・トラウト(四八)はショベル様の花弁で、ラップ状のカップは鮭肉色で名花である。この品種の花形によく似たパッショナーレ(五六)は、我が国ではよく着色しない。その他、古花のローズ・カプリース(五二)を父本としてできたものに、マリエッタ(六三)、デビュターン(五六)、サロー(五八)等がある。また、白花大杯とサンモン・トラウトとの子のメリーワイドー

オフィーリア（ピンク大杯）



(五八)も有名であつた。コートラル・ピンク色のカップを持つ前記のデビュタントを父本として、ジュエル・ソング(六七)、オフィーリア(六七)が作られ、この二品種は輝くようなコートラル・ピンクのカップを持つ美花である。ローズ・ロイヤル(五八)は前記のサーモン・トラウト以後、美しい花形を誇る花として有名で、しわ一つない花弁と、ややラッパに近い長いカップを持つ名花である。ロマンス(五九)はローズ・カブリースを母本としてでき、最も有名なピンクで、広い丸弁でカップは縁がいくつかのひだで構成され、非常に立派な花である。フェアリー・プロスペクト(六二)は、ジュエル・ソングやオフィーリアの姉妹花で、受皿状のカップはサンゴピンクで、リチャードソン遺作の最後の名花であろう。最近、バラのような香りを持つフラグラント・ローズ(七九)が発表された。

ダイルマナック（ピンク大杯）



イギリスでは過去に、小輪だが濃いローズ色のカップのローズワーズイ(五三)があり、最近ではいくつかの優れた花ができていて。このうちダイルマナック(七二)は、サーモン・トラウトを良くしたようなタイプで、白色大杯のインバー・ポリーケーを母本として作られ、ピンク中、完全ともいえる花形の名花である。

アメリカでは、最近多くの品種が紹介され、アクセント(六〇)はカップは赤味の強いローズで、最も濃いピンクとして知られ、この子に多くの品種ができている。キヤリタ(五八)は大きな平たいカップの鮭肉色で、育種にも用いられている。リサイタル(七二)、ルビースロー(六九)は共に花色が濃く、前者はピンク赤色で後者はルビー色に近い。濃色で花形の良いものにクール・フレイム(六九)がある。その他、アーリローズ(七二)など濃ローズの大きなカップを持つ品種が作られて

ヴェラン（ピンク大杯）



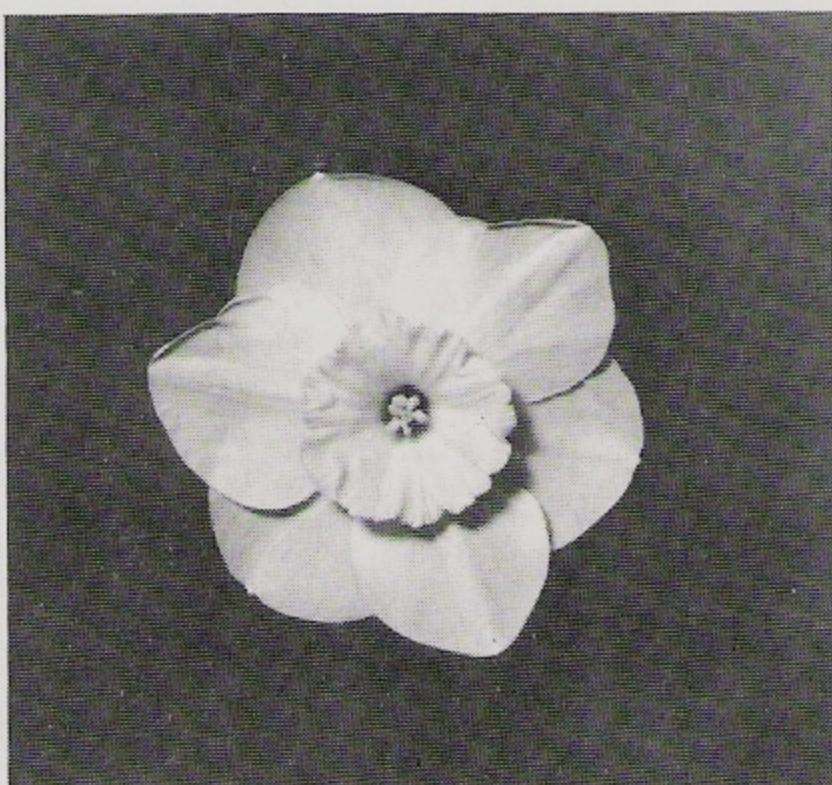
いる。

このクラスには、カップが白にピンク覆輪を持つものがあり、アイルランド作のレインボー（六一）が有名で、アメリカ作のハート・スロブ（七六）は濃ピンクオレンジの覆輪花である。

オーストラリアでは、ミセス・オスカーロナルズ（五六）や、ロザリオ（四〇）が古花では最も良い品種として、アイルランドでも栽培された。その他、濃色のピンクにベスト・ウイッシュ（五五）やタラゴ・ピンク（五五）があつて、近年ではマイ・ワードが知られる。ヴェラン（六八）やヴァフーは美しく、花弁の立派なのが優れた特色である。

ピンクズイセンは過去においてあまり顧みられなかつたが、現在はたいへんボピュラーになつてゐる。そして、花弁が淡黄でカップがピンクの品種も見られるようになつた。

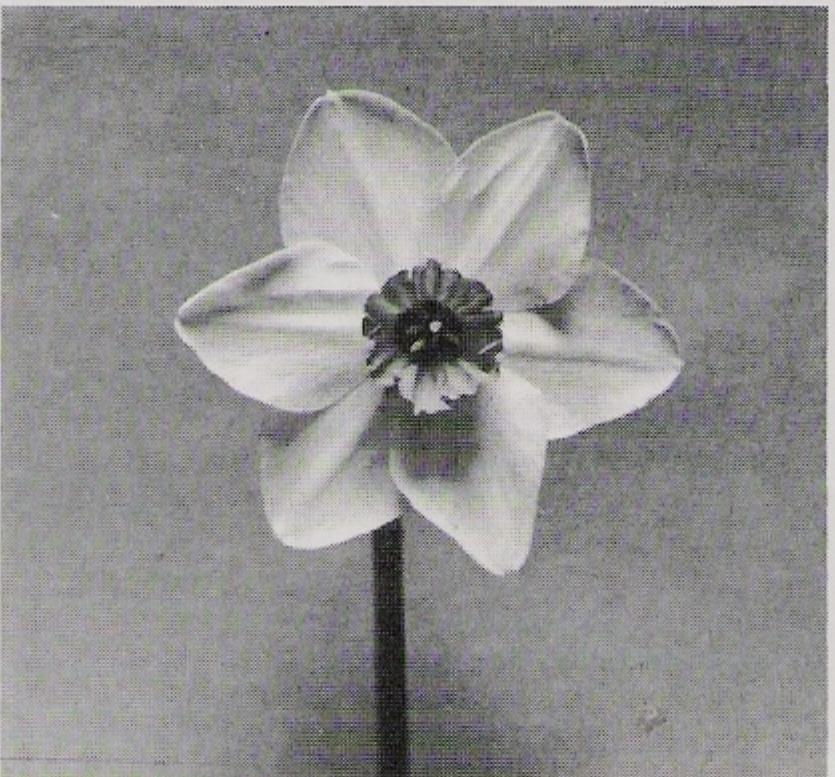
ヴァローナ（白色小杯）



＜小杯スイセン＞

口紅スイセンの血がこの部門にたいへん強く、口紅と大杯スイセンが交雑されて、多くの品種が作られている。口紅スイセンの変種のポエタルム、ヘルениクスやエクセルツスがこの成立に関与している。黄・赤ではチュングキング（四二）が古名花として知られ、カップはオレンジ色。白・赤ではロッコール（五五）が、カップが橙赤色で名花であり、過去にマタパン（四一）、マームード（三七）が有名であり、最近の品種ではダルハウイン（六一）やベン・リネス（七二）等が知られ、共に美しく後者は花弁が最も白い。カル・ビーグ（七一）は幅広い花弁で、カップは中心がオレンジで、縁が鮮やかな赤色を示す。白花では、チャイニーズ・ホワイト（三七）が作られ、たいへん有名になつた。近年ヴァローナ（五八）が名花として

ロツコール（白・赤大杯）



八重咲スイセン



ポピュラーになつていて、この花は、丸弁で花全体が円形である。他に、小さいカップの中心のグリーンが強く、縁が黄色のひだになるグリーン・ヒルズ（六〇）や、大輪の立派なサクラメント（四九）、クール・クリスタル（六六）などが美しい品種である。ピンクはオードボン（六五）があり、カップは白地に鮮やかな濃サンゴ色の覆輪である。

八重咲スイセン

八重咲きは栽培されている野生の種の多くに、突然変異で現れた。また、八重咲きと一重咲きとの交雑から園芸品種が作られた。

イギリスの有名な草本書「地上樂園」を書いたパーキンソンが、一六二〇年にプセウド・ナルキススの八重咲きを発見した。この花はヴァン・サイアンと呼ばれた。

庭園用の品種は、大杯スイセンの八重が、生産や育種されている。古くイギリスで、バター・アンド・エッグズと呼ばれたものは、ゴールデン・フェニックスの名も付けられ、なお庭植えに見られるそうである。古花ではあるが、淡黄・オ

る。亞種モスカーツスの八重も知られている。ミノールの変種。ミルスの八重は、リップ・ヴァン・ワインクルの名で知られ、ヨンクイルラの八重は良いものとされ、クイーン・アンズ・ダブル・ジョンキルと呼ばれた。房咲きスイセンの亞種パピラーケウスの八重は、ダブル・ロマンと呼ばれ、イタリアで栽培されている。なお、日本スイセンにもいろいろの八重があるが顧みられない。口紅スイセンでは、オルナツスの八重はダフニの名が付けられ、エルヴィアイラ（〇四）という品種の、枝分かれの八重のチアフルネス（二三）はよく知られる。

レンジのテクサス（二一八）、黄・赤のタヒチ（五六）などが有名で、白・赤のアクロポリス（五五）は代表的なものである。現在では、より美しい花形のものや白・ピンクなどができている。

ヘトリアンドルス・スイセン

カップはベル形で、花弁は後ろにそり、甘い香りがあり、野生種トリアンドルスの特徴が移されている。この種のフォー

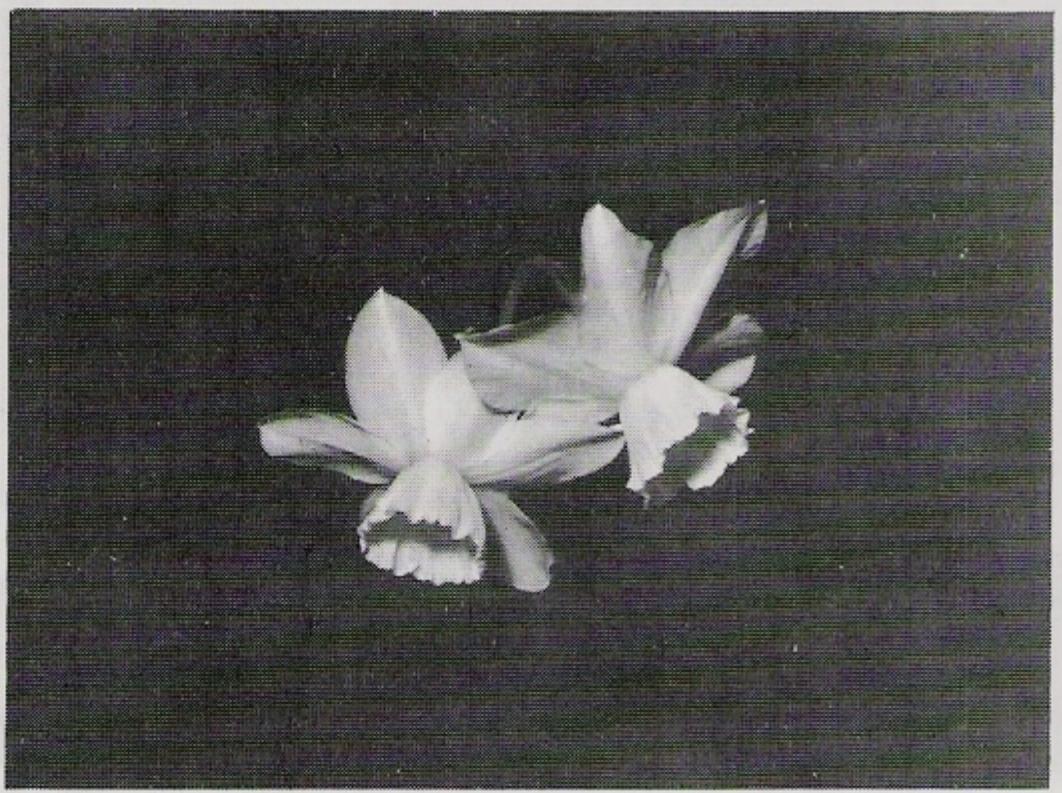
ムはいくつかあるが、変種アルブスや、これを大型にしたようなロイセレウリイを父本として、ラッパ、大杯、小杯、房咲き、口紅などと交雑して品種が作られた。花色は、ふつう白や淡黄であるが、まれにカップが赤色を帶びたものや、最

近ピンクのものが作られた。白色の品種は、サラライア（一六）、トレサンブル（三〇）リプリング・ウォーターズ（三二）、淡黄のものは、レモン・ドロップス（五六）などである。カップが花弁の長さの三分の一以下のものでは、ソートフル（五一）や赤味のカップを持ったサンバ（五一）が、ミニチュアにはエープリル・ティアーズ（三九）などがある。

ハーヴェスト・ムーン（一三）はレモン黄のラッパズイセン形で、魅力ある花である。惜しいことに、全てのストックがモザイク病になつていて、ハーモニー・ベルズ（六二）はレモン黄で、原種を数倍くらい大きくしたような形の二、三花を付け、これに似た白花にシルヴァー・ベルズ（六二）がある。



ハーモニー・ベルズ（トリアンドルス）



アリッシュ・メル（トリアンドルス）



CLEAN & GREEN

花・観葉植物の鉢植えに最適!!

プロミック錠剤



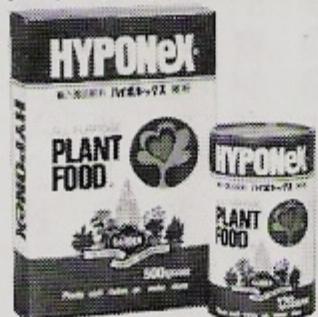
- ◎土の表面に置くだけでOK…。
- ◎2~3ヶ月間安全確実に効き続けます。
- ◎清潔・無臭でベランダ・室内園芸に最適。
- ◎株全体が大きく丈夫に育ち、花や葉の色もグーンと鮮やかに美しくなります。



使用後に残りカスの心配ナシ

《成分(%)》

チッソ…12 マグネシウム…1.0
リンサン…12 マンガン…0.10
カリ…12
<約100錠入り>
●50錠入りもあります。



ハイポネックス

チッソ…6.5 リンサン…6 カリ…19

10日に一度バケツ1杯の水に一さじのハイポネックスをまぜて施すだけで…花の色がグーンと鮮やかになり、病害虫、霜、旱ばつに対する抵抗性がつきます。

日本総代理店

丸和化学株式会社

〒553 大阪市福島区海老江5丁目2-7

●大阪 06(458)9272(代)

●東京 03(428)7000

▶資料請求は企画部K係まで



植物活力素

メネデール[®]

花づくり、盆栽づくり、庭づくり
の秘けつを科学でとらえた
ニュータイプの園芸用活力剤



メネデールは植物の精です。

メネデールはこんな時、お役立てください――

■新たに草花や苗木、庭木を植えるとき

週に一度 100倍に薄めたメネデール液を根元にかけてやりますと
植えいたみを素早く治療して活力を増進、イキイキと活着します。

■庭の少ない都会の屋内園芸に

メネデールは弱光下の同化作用を強める働きがあり、屋内栽培にも必需品です。

■移植や株分けにもどうぞ

■さし木、さし芽、つぎ木、株分け、取り木などに
こんな場合にもメネデールの発根効果は抜群です。
また、高級園芸植物にも薬害は皆無です。

■植物が弱ってきたとき

50~100倍液を根元にタップリ与えると、不思議に元気をとりもどします。

■生け花などにも手軽にどうぞ

生け花の水あげなどにもお使いください。ほんの数滴、花瓶の中にたらすだけで水あげ良く、花もちもグンと長くなり夏でも容易に水がくさりません。

●種別 : 100cc・500cc・2ℓ・20ℓ

●メネデールは原液を約100倍の水にうすめて使います。

●本品は人畜無害ですから安心してお使い下さい。

●全国百貨店園芸部・園芸種苗店にあり 資料送呈 (要切手100円)



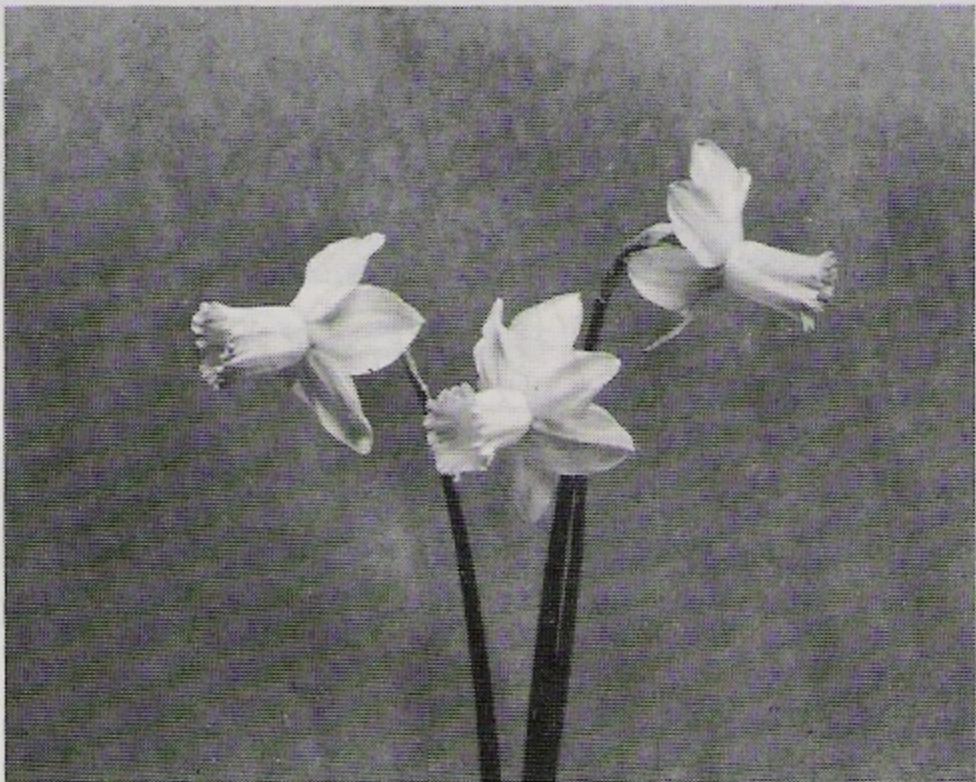
MOL(株) メネデール 化学研究所

〒530 大阪市北区中之島3丁目6番32号・大ビル TEL.(06)441-2810(代)

ヘキクラミネウス・スイセン

野生種キクラミネウスを父本として用いて作られたものが多く、主に副花冠がラッパ状で、花弁は美しく後ろにそり返るので、たいへんユニークなタイプである。画期的なことは、花弁が白でカップが淡黄の大杯スイセンのミツチーレーンに、この種を交雑して三つの姉妹花ができたことである。黄色のチャリティ・メイ(四八)、二色調のダブ・ウイングズ(四九)、白色のジェニー(四三)で、これらは今日も美しいものとして知られる。

さて、黄色では、フェブラリ・ゴード(二三)やピーピング・トム(四八)が有名で、他にマーチ・サンシャイン(二三)、ウッドコック(四九)などがあり、副花冠がオレンジのチッカディー(五九)やサテ



ヘジョンキラ・スイセン

最近、アメリカやニュージーランドでいくつかの品種が作られ、白・クリームのサーフサイド(七二)、前記のジェニーの子に黄色のライバル(七七)がある。なお、二、三の副花冠がピンクのものが紹介されていて、ライラック・チャーム(七三)は有名である。

主にヨンクイルラや Yunキフォーリウスのハイブリッドである。品種は原種に似て二～六花を付け、香りが強い。カップの長いものではゴールデン・セプター(一四)、スイートネス(三九)がポピュラーである。カップの短いものでは、我が国でも知られるトレビシアン(二七)が有名で、珍しい白色にはナンセゴラン(三七)、二色調ではスノーアン・バンティング(三五)、黄・赤ではスザン・ピアスン(五四)などがある。カップがピンクのものは、古くシェリー(三五)が、最近ではベル・ソング(七一)がある。

アメリカでは、逆色大杯のビンキー等を母本として、花弁が黄でカップが白色のいくつかの品種が作られている。ビビ

ナンセゴラン（ジョンキラ）



シルヴァー・チャイムズ（房咲スイセン）



ツト（六三）、ヴァーディン（六五）、チャヤツト（六八）などである。最近のキヤナリ（七八）は逆色大杯のディドリームを母本として作られ、花弁が後ろにそり、優美な花を付ける。

ヘ房咲スイセン

タゼッタ・スイセンと呼ばれ、タゼッタとはイタリア語で、小さいカップという意味である。この種は、亜種や変種が多く、また地域的変異も多い。カナリー諸島や地中海沿岸の国々からインドを通して、更に中国や日本にまで広がっている。

この種類は寒さに強くなく、オランダ

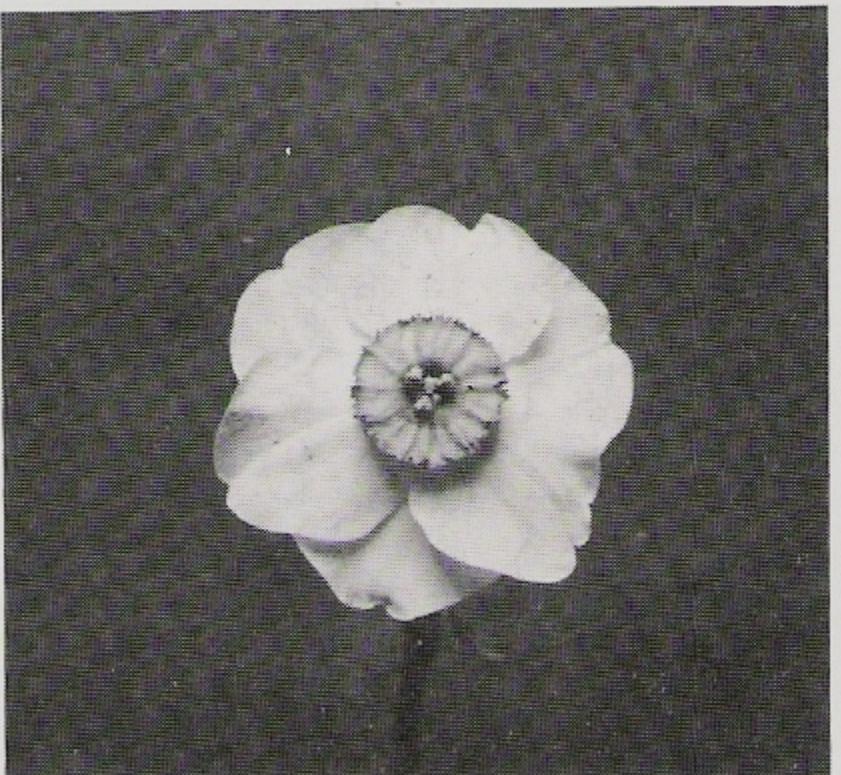
では一七世紀から一九世紀にかけ、南仏から導入した房咲きスイセンを栽培したが成功しなかった。今日、切り花はシチリア島や、南仏で大量に生産されている。

ヘ口紅スイセン

タゼッタ・スイセンとの雑種、ポエタズは、対寒性が強く丈夫で、最初オランダで有名なゼラニューム（三〇）やグラグフードが作られた。ハイフィールド・ビューティー（六四）は、オーストラリアで作られ最も立派な房咲きといわれ、直徑五センチくらいの黄にオレンジ色のカップの大輪を、一茎に二、三花付ける。シルヴァー・チャイムズ（一六）はトリアンドルスとの雑種で、十輪くらいの白花を付ける。なお、日本スイセンは、野生の変種であり、部門10に含められる。

この部門は、口紅スイセンの仲間だけの改良品種である。野生種は、スペイン

ミラン（口紅スイセン）



格で売られたという。

実用には、アクテア（二一七）が広く知られた。イギリスで作られたシード・グリン（三〇）、ミラン（三二）や、アイルランドで作られたカンタービレ（三二）等は観賞用に優れた品種で、これらはカップの中央がモスグリーンで、縁が紅農で美しい。

△種・野生のフォーム及び雑種△



野生の種は約三十種あり、ヨーロッパ、地中海沿岸地方に産し、特にスペイン、ポルトガルに多い。この部門では野生の亜種や変種などを加えると非常に多く、すべてを解説するのは無理で、海外や我が国の園芸大辞典（筆者＝ナルキススの項）などを参照されたい。次にいくつか

から中央ヨーロッパに分布していく変異が多く、九変種とされる。育種に用いられたものは次の三変種が主である。一は、ポエティクスの変種レクルウスで、フェザント・アイとして親しまれるもので、これは花弁の白さや、グリーンの目、それに香りを品種に伝えた。二は、ラディフロールスの変種ポエタルムである。このカップの赤色は、ほとんど全ての大杯や小杯の赤色やピンクの品種の祖先となっている。三は、ラディフロールスの変種エクセルツスで、園芸上、早咲きのオルナツスとして知られている。

この口紅を最初に改良した人はイギリスのエングレハートで、多くの実生を作つた。そのうち一九〇七年に展示されたホラスは、オルナツスとポエタルムの交雑からでき、そしてストックは買い占められ、十年後には一日で十五万本の切り花が市場に出荷され、四千ドルを越す価

△種・野生のフォーム及び雑種△

亞種モスカーツス（部門10）

を述べる。

プセウド・ナルキススは野生のラッパズイセンで、フランス、ポルトガル、スペインが故郷であるが、イギリス、ベルギー、ドイツ及びイタリア北部にまで広く分布している。ギリシアのサントリニ島で、古代遺跡の壁画にラッパズイセンが描かれていて、紀元前一五〇〇年ころのもので、スイセンを描いた最古のものといわれる。変種フミリスは、南部スコットランドで自生状に見られるそうである。亞種マーヨル（ヒスパニクス）は、カタログにはマキシムスともされている。花色は濃黄で野生のラッパズイセン中、最も大きく丈が高い。スペイン北部、フランス南西部、及びピレネー山脈に自生するそうであるが、野生のはつきりした記録はないといわれる。白色ラッパでは、ピレネー山脈に産する亞種モスカーツスが最もよく知られている。

アスツリエンシスは世界最小のラッパで、高さは約十^{セン}で産地はスペイン、ポルトガルで、高さ千二百~千八百^{セン}の所に育ち、園芸上ミニムスとも呼ばれ、黄色の花を付ける。ミノールは、園芸上ナヌスとして知られ、前種の二倍くらいの高さで、より大きく区別できる。野生地は不明で、一六〇〇年ころからヨーロッパの庭で栽培されている。

キクラミネウスは、ポルトガル、スペインの北西部に産し、黄色の花は長さ約二・五^{セン}で、ラッパは細長くうつむき、花弁は一八〇度反り返る。この花は、

一六〇八年フランスのヘンリー四世の庭で描かれている。そして一六三三年の図に基き、一八一六年に命名記載された。

トリアンドルスは、前種同様、ポルトガル、スペインに産し、花の長さは約二^{セン}で、花弁は強く後ろに反り返り、カップはつり鐘状である。花色は白から黄色まであり、高さも十~二十一^{セン}まで変化がある。変種のアルブスは、ふつう乳白色であるが、白から硫黄色の変化があり、よりゴブリット状のカップを持ち、クリームから硫黄色である。ロイセレウリイは、花色は純白で、最も大きいものでほとん



ナルキスス・トリアンドルス

変種アルブス（部門10）

ど二倍くらいの高さと大きさを持つ。コロルは濃クリームから黄色で、ボルトガルのフェルナンデスがこの種の基本種と考えた。他に起源不明でよく知られないブルケルルスや、オーランティアクスというフォームがあり、後者は黄金色で、花弁が広く美しいものといわれる。

この種は一五七九年から栽培されていて、一七五三年リンネが命名した。

ブルボコディウムは、カップの形から「フープ・ペチコート」の英名がある。イベリア半島と、モロッコ、アルジェリア及び南西フランスに産する。約六亜種と、十二変種がある。副花冠は花のわりに大きく、深さは十五^{ミリ}くらいで、花弁は狭く小さく、長さも十五^{ミリ}くらいである。ふつうに知られるものは、亜種ウルガーリスの変種コンスピクウスで、花は濃黄色で、高さは十^{センチ}くらいである。この亜種ウルガーリスには、他に二つの変種があり、ニワーリスはオレンジ味の黄色で、この種中、最小である。キトリーヌスは、花は淡レモン黄色で、この種中、最大輪の一つである。亜種オベススは、花は鮮黄色で葉はよじれて地にはう。亜種ロミエウクシイは、モロッコのアトラス山系に産し、花は硫黄色である。以前、モノフィルルスとして知られていたものは、カンタブリクスの亜種ともされ、スペインとモロッコのアルジェリアに産し、花は白色で十二月に咲く。

秋咲きのものには、エレガンス、セロティヌス及びウイリディエフロールスがあ

る。後者は、日本スイセンの緑花のような八重でなく、花弁は狭い星状で、花色はモス・グリーン一色で魅力ある花であり、スペイン、モロッコに産す。

ヘス・プリツト・コロナ スイセン

副花冠が三分の一以上裂けるもので、元来、多くの種に突然変異として見られた。例えば、ヒルのエデン（一七五七）にはミノールのこのタイプの図があり、フレンド（ヘリ飾り）・スイセンと呼ばれた。フェルナンデスも野生の種にこのようないタイプが多く見られると述べている。二色のラッパ、ビクトリア（一八九七）が六浅裂することがあり、その一つバトンホールから作られたものに、このようなタイプが現われ、「巨大な蘭咲スイセン」と呼ばれた。また、ある人は大杯の品種の同様なものを育種して、子孫をパピヨン（蝶）・スイセンと名付けた。

さて、オランダの育種家が、バトンホールの実生から一九二一八年にカラ（えり）、スイセンの名で系統を作り始め、スピリット・コロナの品種を多く作った。最初一九五六には、二十品種ほど名付けられ、その中に現在我が国で市販に見られるオリエンジエリー（五七）がある。

海外の育種家が、多くのスライドを持参したおり、その一枚に、このスピリット・コロナの各色が、展示会に整然と並べられているのが写っていた。筆者は、あまりスイセンらしくないこのタイプが

見事に展示されているのを見て、感心した。

栽培

植える場所は、排水や日当たりのよい所が最も大切で、陰地は花付きが悪くなり、排水が悪いと根腐れや、球根の腐敗が起こる。土は、砂質壤土がよいが、特に選ばない。二、三年、植え放しの時は、夏に、やや陰になるようにする。

植え込みは、九月から十月で、予定地を深さ三十センチほど掘り、元肥として、骨粉、硫酸カリと、腐熟鶴糞を少し入れる。すなわち、カリとリン酸が大切で、窒素が多いと腐敗しやすい球根になる。そして、球根の高さの二、三倍の深さに植える。すなわち、十センチあまり覆土し、間隔は十センチくらいにする。

鉢植えは、ラッパや大杯など、大型球は七号鉢に一球とし、小型の球根は五号鉢に三球を植える。植え込んだ後は、週に一度くらいは灌水する。なお、露地植えの場合も、冬の乾燥期は同様にする。掘り上げは、六月ころ、葉の枯れ始めたころ、晴天の日に行う。球根に傷をつけないように掘り取り、よく乾燥させ、風通りのよい冷暗所で、植え込みまで貯蔵する。

病害虫は、趣味栽培では次の事に留意する。ベイサル・ロット(底腐れ病)は、

フイザリウム菌によつて起ころ。ベンレートの五百倍液に、球根を三十分ほど浸し、乾燥してから貯蔵すると良い。貯蔵中に腐りやすいから、時々見て、柔かくなつたりして腐敗の恐れのある球根は取り除く。

モザイク病は、葉に濃い黄縞に入る病気で、ウイルスが原因で、抜き捨てる以外に治療法はない。予防としては、媒介するアブラムシをマラソン乳剤などで殺虫し、切り花にする時は、同じナイフを使わないようとする。生産地では、被害の大きい、スイセンハナアブに留意することが必要である。

スイセンと私

筆者が海外の名花を集めて以来三十年近くなるし、つくづく時の流れの速いことを想う。

京都の銀閣寺のそばの、日の良く当たらぬ小さな庭で、白花のカンタツリスやピンクのロザリオが申しわけ程度の小さな花をつけたが、それはそれなりに美しく印象深かつた。

この学生時代は、農学部で学ぶかたわら、仏文学、英文学、美学を聴講したり、音楽もへたな横好きでよくコンサートに行つた。いろんなことでずいぶん道草をしたが、無駄になつていない。ただ、「去年(こぞ)の雪いまいすこ」と思つてい

筆者の作出花（白色ラツバ）

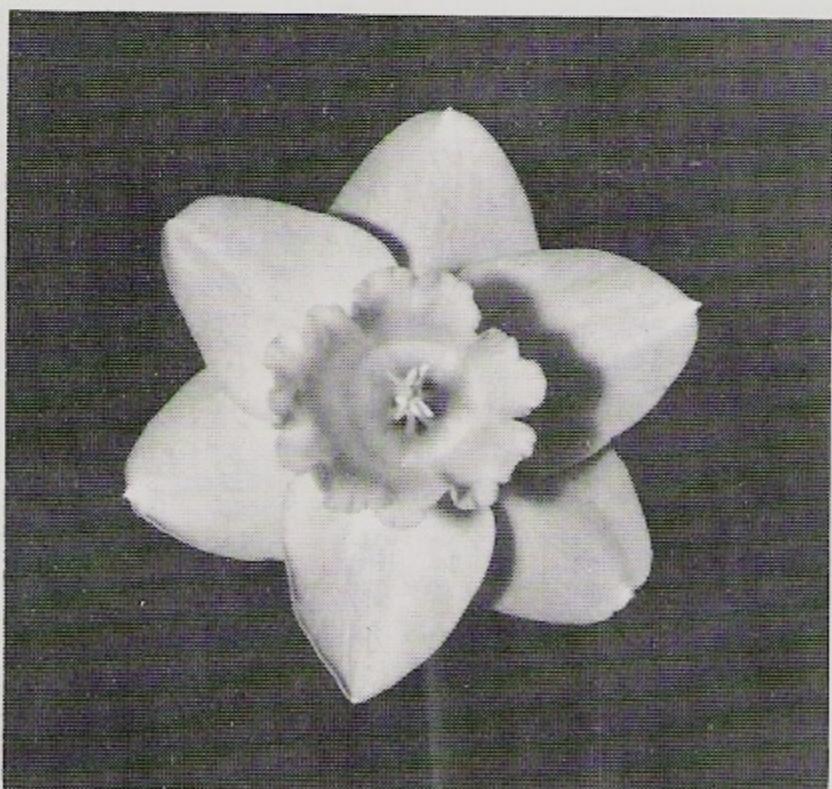


る。

思い出多い京都から枚方（大阪府）に移つたころは、アイルランドのウイルソンやリチャードソン（花のトピックに書いた）の他、スイセンの盛んな各国から色々な品種を集めていた。名花のエンブレス・オブ・アイルランドやロマンスなどが代表的なものであつた。

そのころ、英國王立園芸協会から一九六七年の年鑑に執筆を依頼され、寄稿したこともある。

筆者の作出花（黄色大杯）



た、故伊藤東一氏は、「良い水仙の花を眺めていると、どうして造化の神様は、こんなにまで高尚な清楚な花を創ってくれたのかと、つくづく生の喜びに浸り感謝にうなだれずにはいられない。」と雑誌に記している。

さて、一九六六年にやつと試みに二つ交配して、その後も育種して実生を得たが、庭の移植などで多く失い、残つたものから開花した花を見たが、美しいと思えるものは、ほんの数個体であつた。

ピンクではふつう、杏色を含むが、この杏色のないローズの極限と思える（これ以上濃くなるとピンク赤になる）花、白花では花弁が厚いもの、花弁の幅が最も広いもの、毎年コンスタントに雄大な花を付けるもの、花弁が黄でカッブが赤色のものでは、花弁がオレンジ色に見えるもの、黄色ではリチャードソンの名花ゴールデン・オーラとほぼ同様なもの等

である。ただし海外の名花に勝る花を作ることの困難さをつくづく感じている。

けれども近年は、毎年三百近い組み合わせから実生を得てるので、ここ数年の

うちに、より美しい花をと期待している。

イギリス、ニュージーランドやオース

トラリアの有名な育種家に筆者は会った

が、今はすでに高齢や故人となり、樂し

い思い出だけが残っている。

ここに記憶に残る一つの短歌を挙げて

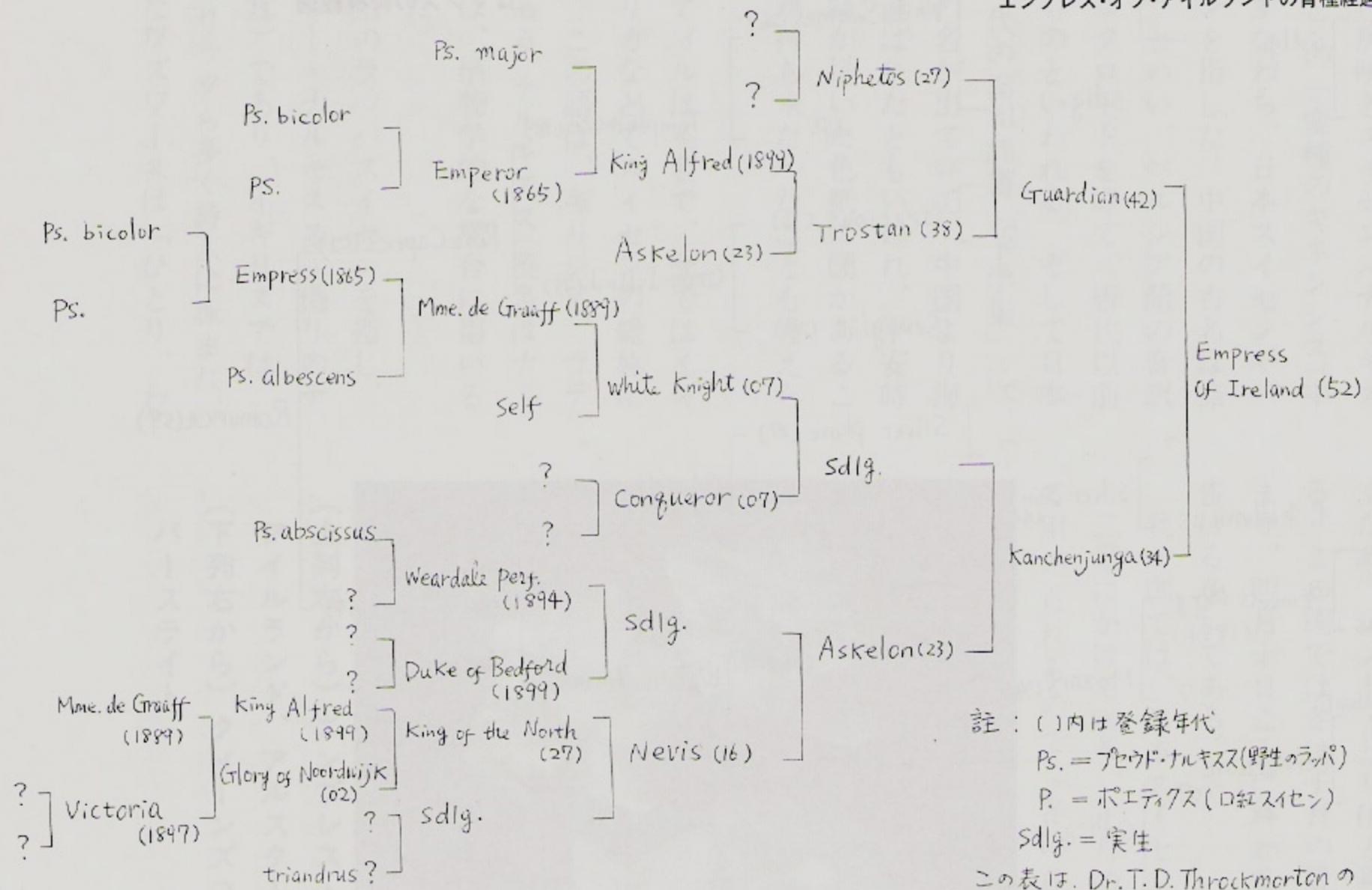
終わりとする。

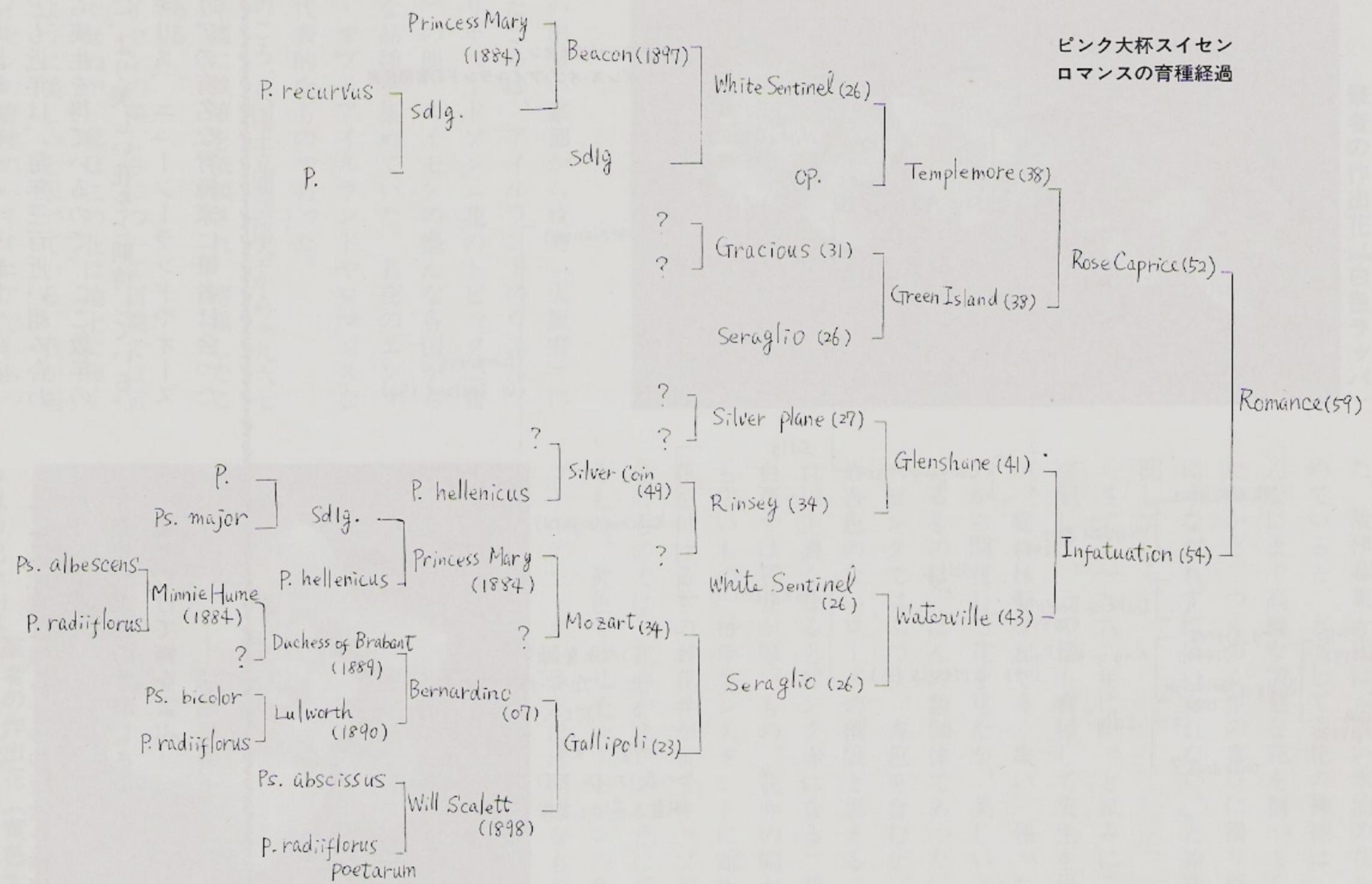
今を匂う水仙のすがしさよ

瞳そむけて悔をよぶ

——深尾須磨子

白色ラッパズイセン
エンプレス・オブ・アイルランドの育種経過





花のトピック

スイセンとダッフォディル

スイセンの語は、今日、全てのスイセンの総称である。もとは、漢名の水仙より来ていて、房咲きスイセン（ナルキヌス・タゼッタ）の一変種のキネンシス（中国の一意）すなわち、日本スイセンや、支那ズイセンを指した。中国の古名は捺祇（ないぎ）といい、ペルシア語の音訛で、古くシルクロードを経て、唐代以前に伝わつたものといわれる。そして日本では、室町時代の漢和辞書「下学集」に、初めて水仙の名が出ていて、中国より海流によつて運ばれたともいわれ、平安時代の藤原良経が描いた色紙に図があることから、人が持ち来たつたことも考えられる。

ダッフォディルは英名で、今ではイギリスやアメリカなどでスイセンの総称になつていて、この語は、ギリシア、ラテン語起源である。ナルキスス（英名はナーチツサス）は、植物学的な場合に用いるようになつた。

元来、野生のラッパズイセンを指し、種名はプセウド・ナルキスス（偽りのナルキススの意）であり、イギリスでは、テニソン、ヘリックら多く詩人に詠まれ、自然を愛したワズワースは「ひとり、わ

びしきさすらいに、黃金色なすスイセンを見ぬ——銀河の中に輝き、きらめいている星のようにな——と一八〇二年に見た光景から詩を作つてゐる。この野生状に育つてゐるダッフォディルは、復活祭の前の四十日間であるレントの季節に咲くため、レント・リリーと呼ばれたりする。この国では冬は十月の最初の週に始まり、四月十日ころに終るので「春を告げる花」である。

我が国では、日本スイセンは十一月から二月にかけて咲き、正月の生け花として用いられるので「冬の花」であり、



（上列右から）エンプレス・オブ・アイルランド、アルスター・クイーン（下列右から）クイーンズコート、バースライト

「新春の花」ともいえる。

歴史に現れる最も古いスイセンに、口紅スイセンと房咲きスイセンがあり、一世紀の医者で、最古の草本書を書いたディオスコリデスが両種を述べ、またローマの作家、ウェルギリウス（七〇—一九 B.C.）も紅色のスイセンと書いていて、これは口紅スイセンを指している。ちなみに、口紅スイセンは（種名はポエティクスで詩人の意）詩人のスイセンとも呼ばれ、ギリシアの詩人に歌われたためといわれる。いっぽう房咲きスイセンは、より古く寺院の飾りや、葬儀に用いられた。

G・L・ウイルソンと L・リチャードソン

ここ緑の島、アイルランドで、過去のスイセンを近年の最も美しい花に高めた二人である。もし、彼等の貢献がなければ、ほとんどの名花は存在しなかつたであろう。

北アイルランドのウイルソン（一八八六—一九六二）は、母親がスイセンを植えていたので、子供のころから興味を持つていた。兄弟は大学に学んだが、彼は寄宿学校を出て、叔父の羊毛工場で働き、夕方や週末にはエンペラー、エンプレス等の品種を育て、色々な品種を集め育種を

始めた。やがて愛好家に誘われイギリスのヴァーミンガムの展示会に行き、また知人の所で当時の名花、ビアーシバとフオーチュンを見て、育種家として、またイオスコリデスが両種を述べ、またローマの作家、ウェルギリウス（七〇—一九 B.C.）も紅色のスイセンと書いていて、これは口紅スイセンを指している。ちなみに、口紅スイセンは（種名はポエティクスで詩人の意）詩人のスイセンとも呼ばれ、ギリシアの詩人に歌われたためといわれる。いっぽう房咲きスイセンは、より古く寺院の飾りや、葬儀に用いられた。

特に白色ラッパでは、今日もなお彼の作出花以上に優れたものが見られないくらいである。一九一二年彼の最初の実生花が咲き、最後の花は、死後五年の一九六七年に咲いている。ストックはオランダの商社に買われたが、それまでに愛好家が得ていた。彼の作出花は、アルスターのニューハーバー大学の庭に友人達の手で集められ、春には美しく咲き誇っている。

一九五〇年に英國王立園芸協会から彼の貢献に最高位のビクトリア・メダルが与えられ、また北アイルランドでの園芸の貢献に、クイーンズ大学から農学修士の名誉学位も与えられている。

彼の親友で、ライバルでもあつたアイルランドのリチャードソン（一八九〇—一九六一）は、カレッジを出たころ、父親が植えた十種あまりのスイセンの新品種に魅せられた。そして二十才のころからこの花を集め出した。

愛好家カリーエ史は、彼にいろいろと教え、死後コレクションの一部を与えた。当時の新品種は、若い彼が買うには高価であつたという。

さて、第一次大戦後、彼はロンドンのショートに展示した。そして一九二二年、趣味から商売に移った。作出花は各色に及ぶが、黄色ラッパ、白・赤及びピンク

大杯などは、世界をリードした。一九五〇年、心臓病になり、彼は死散を恐れたが、死後、夫人がこれを守り一九七三年まで商売が続けられ、世界の愛好家は、その優れた名花を入手できた。彼女は結婚し

季節の園芸・一月

カタログを集めましょう

大手種苗会社のカタログはずいぶん豪華に、美しくなりました。すでに一九八二年のカタログも出揃いました。これらカタログの中には、毎回新しい植物が何種か紹介されています。買う、買わないは別として、コタツの中でこれらをめぐりながら、あれこれ想いめぐらすのは楽しい一時です。庭のない人にもできるコタツ園芸です。二、三の新しい植物の例を拾つてみると、鉢植えにもできるミニ・グラジオラス6種（タキイ種苗）木立性ベゴニア7種（同）ブルーの種わい性大輪リンドウ（坂田種苗）ヒマラヤニオイエビネ（同）など目につきました。カタログはその時代の園芸レベルの顔です。

カタログ請求には二〇〇円くらいの切手を同封するのがエチケットです。これらのほか「趣味の園芸」（NHK出版、「ガーデンライフ」）誠文堂新光社などの雑誌には多くの種苗会社の広告がでています。これらを頼りに、カタログを集めてみるのもよいでしょう。

ラベルの点検をしましょう

一年の間にラベルが消えたり、なくな

た時からスイセンに興味を持ち、彼を助けた。一九七八年に他界するまでこの分野に貢献したミセス・リチャードソンの功績も大きい。

つたりするものです。この一月に、すべて点検し、消えかけたものも含めて、新しいラベルとつけなおしましょう。私の経験では木に墨で書いたり、セルロイド板に消えないインク（インデリブル・インク）で書いたり、ラベル用鉛筆（芯はクレヨン様）などを使つたり、ずいぶん試みてみましたが、結果はどれも思つたほど長保ちしませんでした。いまでは表面のザラッとしたアクリル板のラベルに3Hの鉛筆で書くのが、手数もかからず、細字も書くことができ、案外長保ちがするものです。鉛筆書きでも二年は雨ざらしに耐えます。なおラベルは表、裏に必ず書くことです。鉢に挿したりした場合、鉢の表面の砂が叩き上がつて消えることがありますが、両面に書いてあれば片面は残るものです。

室内鉢もの長保ちのコツ

年末から年始にかけて、室内に鉢ものを持ち込むケースがふえてきました。長保ちさせるにはできるだけ暖房の室を避けたいものです。まして暖房具の近くに「熱帯植物だから」といつて置くのは最悪です。シクラメン、シャコバサボテン、ポインセチア、冬咲きベゴニア、観葉植物などみな同じです。（旅人木）

<h2 style="text-align: center;">今月の園芸 ショッピング</h2>	<p>松永種苗 江南市大字古知野字住吉3 (05875) 4-5151 洋ラン、宿根草各種</p>	<p>栄フラワー 豊橋市南栄町字空池26-3 (0532) 45-2528 洋ラン各種</p>	<p>井上園芸店 名古屋市北区東大曾根町本通5 (052) 981-0583 ヤマユリ交配種球根特売、 今植え、夏に開花</p>
<p>(有)つちもとガーデン 土岐市泉町更生町 (05725) 4-3634 シクラメン、シンビジューム</p>	<p>名鉄フローラ (名鉄百貨店屋上店) 名古屋市瑞穂区熱田東町文斎27-8 (052) 822-7906(本社) マンリョウ名品大株、早咲 ツバキ、ボタン、西洋シャ クナゲ</p>	<p>高蔵寺農協緑化センター 春日井市松本町210 (0568) 51-2718 春植えバレイショ(男爵、 メイクイーン)品ぞろえ豊 富、シイタケ打込材料各種</p>	<p>小川屋園芸 名古屋市西区比良4丁目3番地 (052) 502-5888 家庭用小果樹苗いろいろ</p>
<p>三重興農社 四日市市諏訪栄町2-9 (0593) 53-6631 四日市市河原田町北勢食品卸団地 (センター店) (0593) 47-8551 オモト、ウメ</p>	<p>更農社 岐阜市金園町8丁目18番地 (0582) 46-2212 園芸図書、植木鉢</p>	<p>稻垣農園 豊田市喜多町1-28 (0565) 32-0398 豊田市小坂町9丁目60番地 (小坂店) (0565) 31-6011 ミニ温室、暖房器具、フラ ワースタンド</p>	<p>堀田種苗商店 名古屋市中川区小塙町61番地 (052) 361-0828 ツバキ、ボタン、バレイシ ョ種イモ</p>

スイセン

品種と分類···

ラツパズイセン···

2

大杯スイセン···

4

小杯スイセン···

9

八重咲スイセン···

15

トリアンドルス・スイセン···

17

キクラミネウス・スイセン···

18

ジョンキラ・スイセン···

18

房咲スイセン···

19

口紅スイセン···

19

種・野性のフォーム

及び雑種···

20

スプリット・コロナ・スイセン···

栽培···

スイセンと私···

花のトピック···

季節の園芸···

今月の園芸ショッピング···

29

27

23

22

表紙
スイセンのいろいろな
品種

裏表紙
花びんに生けた

スイセン

カット
甲田三千夫

も
く
じ

編集後記

しょ
う
か。

中日園芸文化協会郵便振込口座番号変更

郵便振替事務が機械化される準備のため、中日園芸文化協会の口座番号が一部変更されます。今後の会費振込の際にはおまちがえのないようにお願いいたします。名古屋7156003

あけましておめでとうございます。穏やかで明るいお正月をお迎えでしょうか。昨年も一年間いろいろありましたが、良かったことも良くなかったことも、すべて一応過去のものとして、八二年を新たな気持ちでがんばりたいと思います。よろしくお願ひ申しあげます。

新春を飾るにふさわしい清そな花「スイセン」をお届けします。色のさみしくなりがちなこの季節を明るくしてくれるスイセンを、皆さんのお庭にもいかがで

編著者	くらしの中の花	第70号
発行所	名古屋市中区三の丸一丁目6番1号	
発行責任者	堀中溝口正也	中日新聞社事業局内
発行日	昭和57年1月1日	(毎月一回一日発行)
年間購読料	三千円	



●くらしのなかの花 昭和57年1月1日発行(毎月1日発行) 第70号
●発行人 溝口正也 ●昭和51年2月25日第3種郵便物認可
●発行所 中日園芸文化協会 名古屋市中区三の丸一丁目六番一号 中日新聞社事業局内 電話二二〇一八八一一
●年間購読料 三千円